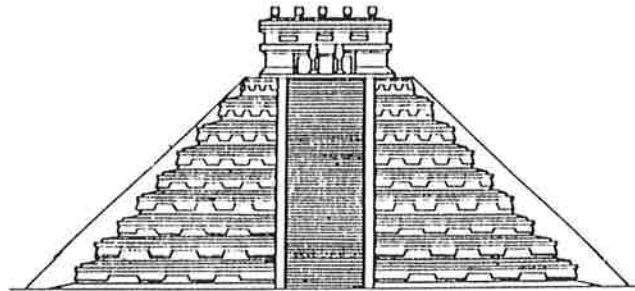


日本イコモス国内委員会

JAPAN ICOMOS INFORMATION

第4期 第9号 2000年2月7日 発行



目 次

特集・メキシコ総会報告—はじめに	石井 昭	1
メキシコ総会・水中文化遺産委員会 (ICUCH) に出席して	荒木伸介	2
メキシコの歴史的遺産—スペイン植民都市とスペイン時代以前の遺跡 ..	土井崇司	4
総会 (第1部・第2部) の主要議事	石井 昭	10
メキシコ総会を終えて—偶感	伊藤延男	14
ワークショップ「Historical towns and villages」の論点とその様子	片方信也	15
メキシコにおける第12回総会と Legislation Session について	河野俊行	17
アスタマニアーナで始まるメキシコ会議	前野まさる	19
文化観光専門委員会報告	宗田好史	23
第12回イコモス総会メキシコ大会に参加して	西村幸夫	25
イコモス第12回総会 (メキシコ) に出席して	大河直躬	27
イコモスメキシコ総会に出席して	杉尾邦江	30
諮問委員会議 (ADVISORY COMMITTEE MEETING) 報告	石井 昭	33

JAPANESE NATIONAL COMMITTEE

ICOMOS

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES / 国際記念物遺跡会議

表紙 : チチェン・イツァーのカステイヨ
COVER : Castillo in Chichen Itza

特集 メキシコ総会報告

はじめに

本誌の前号に載せた「速報」でも紹介した通り、去る1999年10月17日から23日までの1週間においてメキシコ国内の4都市（メキシコシティ、グアナフアト、モレリア、グアダラハラ）で開催された第12回 ICOMOS 総会（GENERAL ASSEMBLY and INTERNATIONAL SYMPOSIUM）には、わが日本イコモスからも、総勢 11 名の会員が参加しました。すなわち、荒木伸介、土井崇司、石井 昭、伊藤延男、片方信也、河野俊行、前野まさる、宗田好史、西村幸夫、大河直躬、杉尾邦江（アルファベット順）の各氏です。

本号では、これらの方々の全員による寄稿から成った「特集・メキシコ総会報告」をお届けします。先ず、当総会におけるプログラムの要点を記し、併せて誰が何処に出席したかを示しておきましょう。

総会 第1部 (10月17日)

会場 MEXICO CITY - PALACIO DE BELLAS ARTES
出席者 荒木・土井・石井・片方・河野・西村・大河・杉尾

シンポジウム (10月18-21日)

基本テーマ <THE WISE USE OF HERITAGE>

会場 MEXICO CITY - PALACIO DE MINERIA
部会テーマ <HERITAGE AND CONSERVATION>
専門委員会 ① ARCHAEOLOGICAL MANAGEMENT, ② UNDERWATER CULTURAL HERITAGE,
③ ANALYSIS AND RESTORATION OF STRUCTURES, ④ RISK PREPAREDNESS
出席者 荒木

会場 GUANAJUATO - CENTRO DE CONVENCIONES
部会テーマ <HERITAGE AND SOCIETY>
専門委員会 ① ECONOMY OF CONSERVATION, ② TRAINING, ③ LEGAL ISSUES,
④ CULTURAL ROUTES, ⑤ INDUSTRIAL HERITAGE(*)
出席者 河野・西村・杉尾 (* 設立準備中の専門委)

会場 MORELIA - CASA DE LA CULTURA
部会テーマ <HERITAGE AND TERRITORY>
専門委員会 ① HISTORIC TOWNS AND VILLAGES, ② VERNACULAR ARCHITECTURE,
③ WOOD, ④ EARTHEN STRUCTURES, ⑤ STONE
出席者 土井・片方・前野・大河

会場 GUADALAJARA - HOSPICIO CABAÑAS
部会テーマ <HERITAGE AND DEVELOPMENT>
専門委員会 ① WALL PAINTING, ② CULTURAL TOURISM, ③ HISTORIC GARDENS AND
SITES, ④ PHOTOGRAMMETRY, ⑤ 20TH CENTURY ARCHITECTURE(*)
出席者 石井・宗田

総会 第2部 (10月22-23日)

会場 GUADALAJARA - HOSPICIO CABAÑAS
出席者 荒木・土井・石井・伊藤・片方・河野・宗田・西村・大河・杉尾

7日間に及んだプログラムは以上の通りですが、広い意味での「メキシコ総会」となると、これに尽きるわけではありません。直前の10月16日には、諮問委員会、執行委員会、両者合同会議、等々が催され、日本イコモス代表としての石井と本部執行委員としての西村氏がそれぞれ所定の会議に出席しました。また、総会終了後の10月24-30日には、メキシコ国内の古都や史跡を巡る6種のツアー（POST-CONGRESS TOUR）が催され、その中の「マヤ世界探訪コース」に荒木、土井、片方、河野、大河の各氏が参加しておられます。次ページ以下の諸報告は、むしろ、こうした広い意味でのメキシコ総会を扱ったものとしてお読みいただければ幸いです。

(石井 昭)

なにしろハードなスケジュールであった。参加申込書をFaxで送り、出発前にEメールでやりとりしたのだが「空港に出迎へに出るので、便名と到着時刻を報せてくれればよい。」とのことで、ホテル名の連絡はついになく、いささか不安な思いで出発した。

10月15日の17時50分メキシコシティに到着。空港には約束どおり関係者が迎えに出てくれたので一安心。そのおかげか、出国手続きは驚くほど簡単に済んだ。しかし、それからロビーで待たされること約3時間。この間に徐々に参加者の到着も増えはじめ、お互いに自己紹介をするなどしてバスへの案内を待っていた。だれしも長旅の疲れから、早くホテルで休みたく、やがて不満の声があがりはじめた。ようやくホテルの割り振りが決まったようで、ホテルへのバスに案内された時にはとつぷりと日が暮れていた。

翌日は予定もなく、遅い朝食を済ませ街に出た。まずは国立民俗学博物館をめざし、さらにタマヨ美術館を訪れた。夕刻、メキシコ在住の知人と10数年ぶりに会い、その勧めに従い、市内の歴史的町並みをめぐる観光バス(電車のようなスタイル)に乗った。ガイドはスペイン語だけなので、知人が日本語混じりの英語に訳してくれたので大いに楽しめたし、街の配置を頭に入れることができた。残念ながら近郊の遺跡を見る時間はなかった。

10月17日、いよいよ総会開催日である。朝8時から登録受け付けとあるので、早めに出掛けたが、開始されたのは8時半を回っていた。受け付けの手順が悪く、もたつき、すぐに長蛇の列。これなら前日の内に済ませてしまえばよかったと思ったが後の祭り。おまけに私の参加費は支払われていないので、先に隣の受け付けで支払うように言われ、さらに時間が掛かってしまった。申し込みの時点で、クレジットカードで支払うよう手続きをしたのだが、受け取っていないとのことで、再度支払い手続きをしなければならなかった。ところが、帰国してカード会社からの請求を見ると、なんと2重の、しかも私が申し込んだカテゴリーよりはるかに高額で、プログラムの案内に無いほどの額であった。現在、その支払いを拒否し、カード会社に調査を依頼している。一事が万事お粗末で、手順の悪さはグアタハラへの移動、最後の次期会長選挙にまで及んだ。

ICUCH(International Committee on the Underwater Cultural Heritage)は、プログラムによれば19日の14時からになっていたが、POST CONGRESS TOURSの手続きもあり、早めに会場であるPalacio de Mineríaに向かった。受け付けで場所を尋ねているところに偶然にも委員長のRobert Grenier氏が現れ、会場へと導かれた。氏は、私がICUCHの正式メンバーとして未だ登録されていないことについて「石井委員長から強く非難されたが、手続きの関係上、次回まで待つてほしい。しかし今回は、メンバーと同格として対応することに出席者全員の了解を得ている。」との話で私も了承した。部屋には委員長を含め11名が出席していた。委員長の求めに応じ、自己紹介をかねて日本の水中考古学の現状について手短かに話をすることになり、開陽丸に及ぼうとしたとき、オランダの若い委員が「えーとなんとかMARU、えーとえーと・・・?そうだKAIYOU-MARUだ!」と言ったので驚いたが、1979年にオランダ・ドルトレヒトで、建造地に里帰りして開催した「開陽丸展」を少年時代に見て、興味を覚えたのが水中考古学への始まりだと話してくれた。残念ながらその時の私の講演は聞いていなかったようである。実はこのメンバーのほとんどが総会に出席せず、前回からの受け継ぎ事項などについて16日から会議を開いていたのであった。私が出席してからの中心的テーマは①「トレジャーハンティング(Treasure hunting)への

対処」と②「水中文化遺産の世界遺産への対応」であった。①はカリブ海に面した地域では深刻な問題である。国によってはその成果の何パーセントかを収めれば許可されることもあり、大国が競って探査、発掘を行なっている。中には、巨大会社が資金のバックアップをし、自称水中考古学者が調査・引き揚げに参画しているものもある。問題は、人類共有の歴史的文化遺産として公開、還元されることなく、オークションにかけられ好事家の収集品として納まってしまうことである。また、多少なりとも政府の収入になることから各国によって対応が異なり、どのように法の整備を促していくか、どのようにアピールしていくか、その表現を巡っても論議された。②は、特に沈没船に関する問題で、基本的に船は「MOVING MONUMENT」であり、建造国と沈没地とが必ずしも一致しないのが通例である。その所有、権利を巡る基本的問題についてコンセンサスが得られなければ紛糾を呼ぶ恐れもある。この問題に関しては、Henry Cleere氏をオブザーバーとして迎え、協議がすすめられた。可能性としては、スウェーデンのワサ号（1628年、ストックホルム港から処女航海に出たが、港外で突風にあおられ沈没。1961年に引き揚げられ、ストックホルム港に設けられたワサ号博物館で保存修復を施しながら公開されている。）とイギリスのメアリー・ローズ号（1511年、ポーツマスで建造。1545年ポーツマス港外で沈没した。1982年、チャールズ皇太子を総裁とするトラストにより引き揚げられ、現在はポーツマスの海軍基地内にあるドックで、公開しながら船体の保存処理がすすめられ、付属する博物館には遺物が展示されている。）があげられた。特に、メアリー・ローズ号はチャールズ皇太子自身も潜水調査に参加したこともあり、世界遺産委員会の受けはよいかもしれない、この話もあった。一方、第2次大戦時に日本の奇襲に会い、真珠湾に沈んだアメリカの戦艦アリゾナもあり、現在は沈んだままの状態で開催されている。これも広島原爆ドームとの関連を視野に入れておかなければならないとの指摘もあった。世界遺産にノミネートするためには第一に基本的ルールの方針策定であり、今後の課題として継続検討されることになった。

20日の朝から夕刻にかけては、さまざまな調査事例の発表が行なわれた。今回はメキシコが開催地である関係上、中南米からの参加者が多く、日本にはほとんど伝えられていない事例が多く興味深かった。アルゼンチンで発掘された沈没船からは、日用雑器に属する陶磁器が多数引き揚げられていた。私の、数点は日本製ではないかとの質問に対し、数葉の写真の預けられ、日本の研究者の判断を仰いでほしいと依頼された。

21日は、昨日に続く事例発表、そして発表者と委員会メンバーによるディスカッションが行なわれた。委員のほとんどが、午後にはグワダハラに向かうものと思っていたが、委員長をはじめ大多数はその予定はないとのこと、いささか驚いてしまった。私も出発前に発言を求め、昨日以来の発表に対する感想を述べた。探査機器や発掘技術は日本もほとんど変わりがないこと。脱塩・保存方法に関してはわれわれの方がやや進んでいると思われること。引き揚げが完了するまで海底に残された木造船体の保存方法などを紹介し、次の機会にはスライドなどを用意し、あらためて紹介することを約束した。また、アルゼンチンの例のように、陶磁器が引き揚げられることはこれからも予測されるし、陶磁器は交流交易の資料として、また年代判定の上からも重要な遺物である。これに関する研究者の数はたぶん日本の方が多し、研究も進んでいるので協力できると話してきた。

どこの国でもそれなりに、発掘調査の組織、研究機関、引き揚げ遺物を保存し公開活用する博物館、水中考古学研究者の養成・訓練施設などが一体となって活動している。まったく羨ましいかぎりであった。その成果が、全体的に若手研究者の増加、特に女性の活躍が目立った。次期ICUCHは来年12月、あるいは2001年1月に、アルゼンチンの二大学、一研究所の協力を得て首都ヴェノスアイレスで開催することになった。遠い国である。

メキシコの歴史的遺産－スペイン植民都市とスペイン時代以前の遺跡－

土井崇司

もうイコモス会員になって11年目に入っていますが、平生は何回か講演会を聞かせていただいた以外は、日常の仕事に追われて ICOMOS NEWS や JAPAN ICOMOS INFORMATION もほとんど読んでいない不良会員でした。今回は総会もさることながら、メキシコで行われるということで、私の研究テーマに関連して、スペイン時代以前のメキシコの建築・都市空間をぜひ見てみたいと思っていたところ、会議後のツアーでいつかの遺跡を見学することになっているので、初めて参加することにしました。

総会や専門科学部会については、いろいろの意味で大変面白く、また世界の現状を知る上でも大変勉強になりました。会議については、多数参加されているので他の方々にご報告されると思います。私はメキシコの歴史的遺産－スペイン時代からの諸都市とスペインが入る以前の遺跡－についての見聞を報告します。それらは私にとって期待以上に面白く、やはり実際に現地で体験するということが重要であることを改めて知らされました。

スペイン時代からの植民都市

メキシコには相当大規模にスペイン時代からの植民都市の立派な町並みが残っていて、私にとって新たな発見でありました。知識としてメキシコは19世紀の初めまでスペインの植民地であったということは知ってはいましたが、歴史都市がこのようにたくさん、広範囲に残っているというのは、今回訪れ体験してやっと蒙を啓らかれました。世界遺産にも登録されている都市も多く、会議の開かれたメキシコシティ、モレーリア、グアナファト、グアダハラハラの四都市のスペイン時代の部分が世界遺産に登録されています。この他にもサカテカス、オアハカ、プエブラ、トゥラコタルパン、ケレタロなども登録されています。後述のメリダのように世界遺産に登録されていないものでも、相当立派な町並みが残っている都市もあり、歴史遺産が非常に豊富な国であることが実感できました。

最初のメキシコシティでの会議は前日の登録日を除いて開会式一日しかなく、時間が限られていたので、会議の合間に町や国立人類学博物館を急いでまわりましたが、充分見る時間はありませんでした。ただ一日早く到着していたのと宿舎のホリデイ・インがソカロと呼ばれるメキシコシティ歴史地区の中心である広場に面していたので、会議や登録の行き帰りなどに歴史地区の相当部分を見ることが出来ました。

メキシコシティではさすがに近・現代建築が多く見られましたが、歴史地区内では近現代の建物はあまりなく、四、五階を限度として軒の高さも揃えられています。古いままの雰囲気が大体保たれているようです。ソカロ（憲法広場、共和国広場ともいう）は一辺200m以上の広大な中心広場で、コルテスが16世紀の中頃から建てさせたバロックの堂々としたメキシカン・カソリックの総本山と大統領府・大蔵省の入っている国立宮殿や政府庁舎が三方を囲んでおります。町の広場として世界で最も広いものの一つといわれています。広場の残る一辺にはホテルや商店が軒を並べており、我々の宿舎であるホリデイ・インもその一つで、朝食のレストランから大聖堂と広場とがすぐ前に見られて、毎朝巨大なメキシコ国旗が、国立宮殿から一隊の兵士によって軍楽隊とともに持ち出され、広場にコの字型に整列した高校生の見守る中で掲揚されます。夕方も朝とは逆の手続きで降ろされ、また国立宮殿に運ばれ保管されているようです。

ホリデイ・インの近くには19世紀末に建てられた商品取引所を30年ほど前からホテルに利用しているという Gran Hotel というのがあり、その入口ホールは五階ほどの吹き抜

けで、広い天井屋根は美しいステンドグラスであり、吹き抜けの各階の手すりの詳細や、またホール入口には大きな鳥籠がステンドグラスや鉄のアールデコの装飾で飾られていました。このようなアールデコ様式がそのまま残っている建物が、百貨店など他にも二つあるということです。このように歴史地区の中にはバロックの教会や公共建築、それにこのような折衷様式の建築も多く残っているようです。

イコモス総会の専門科学部会では上記の四ヶ所の町に分散して行われ、私はモレーリアに行き、会議最終の2日間は全員グアダハラに再集結しました。この間中、あまり面白くなさそうな発表や会議はオミットして、町を歩きました。私は会議の行われた四つの町の内、鉱山町グアナファトのみは行けなかったのですが、そこもすばらしかったということです。これらの町では規模は小さくなりますが、メキシコシティと同じように、スペイン時代からのルネッサンスやバロックの聖堂、役所や大学などの公共建築が、ソカロと呼ばれる中央広場のまわりに整然と並び、堂々としたデザインの建物が囲んでいるのは印象的です。中心地区は植民地の計画都市の中心として広々と作られていて、その周囲の町並みも相当広範囲に古い住宅や商店の建物が残り、高層の現代建築などによる景観の破壊が殆んど見られず、スペイン時代の雰囲気そのまま残しているのはすばらしいことです。

モレーリアでは中心部の広い部分で、二階建てを超える建物は教会の塔のみで、アクァダクトも残っており、ヨーロッパの中世末から近世初の都市がもとのままメキシコに出現したようです。革命家モレーロスの生家と住んだ家が2軒開放されていましたが中庭式住居です。他の建物も通りから覗くと全て中庭式の様です。メキシコは、原住民との混血も進み、



モレーリア中心部－聖堂の塔以外は殆ど2階建てのみ

ヨーロッパとは相当違うのではないかと漠然と考えていたのですが、このような都市を見る限りは、完全にヨーロッパの延長であるなど強く感じられます。メキシコ社会の上層の人たちはスペイン系の白人で、会議に出てくる人たちもそのような人々がほとんどで、国語がスペイン語であることもあり、やはりスペインを初めとするヨーロッパとの結びつきがいろんな意味で強いのではないのかと感じられました。

グアダハラはメキシコ第二の都市ということで経済活動も比較的活発のようで、町並みの残り方は、旧市街全体とはいかず、限られているようですが、会議場のあった歴史地区の一部にデッキを作り、下は駐車場にしたり、周辺の現代建築の高さを低く揃え、デザインを古いものと調和するようにするなど、現代的な必要と調和させて歴史都市部分を生かす工夫が見られました。またグアダハラでは中心部に広場が多くあり、それぞれの広場は樹木が幾何学的に植えられ、スペイン風のデザインで、昼休みやシエスタの時間から夕方・夜にかけて、人々の生きた生活の場、憩いの場となっていました。会議の運営は

混乱しましたが、メキシコの人々はそんなことは当たり前という感じで、気にせず、よく喋り、よく食べ、よく集まり、ダンスをしたり、街角でマリアッチなど音楽を聞いたり歌ったりして我々の忙しい生活と異なり生活を楽しんでいるようにみえました。

また、会議後のツアーでメリダとカンクンに滞在しましたが、カンクンの旧市街の中心部は既に近代的に変えられていて、中心広場に野外音楽堂が建てられたり、教会はシェル構造の近代建築に変わっていました。しかしメリダは世界遺産に登録はされていないようですが、ソカロとそれに面したルネッサンス様式の古い聖堂とバロックの政庁、大学などの公共建築が残り、旧市街地中心部には広い地域にわたって古い建物が残っていて、ホテルなどに改装され、利用されているものもあります。ここでは改装した建物のスタッコの上にピンクや空色などの派手な色を塗っていましたが、奇妙に良く映えています。このように一地方都市のここにも歴史的町並みが大規模に残っていて、改めてメキシコにはスペイン植民地の残映がたくさん残っていることに感心した次第です。

このような立派な町並みが残っているということは、逆に近・現代での経済状態が芳しくなく、建設活動があまり活発でなかったということで、日本のように建設活動が盛んだった場合には相当破壊されてしまっていたに違いありません。

テオティワカン

メキシコのスペイン時代以前の都市遺跡も、私の研究テーマとも関係して非常に面白く体験してきました。メキシコシティでは、アステカの首都テノクティトランの破壊の上に建設されているので、考古学的な遺跡がビルの谷間に残っている程度で、建築家としてはあまり興味が湧きませんが、郊外に世界遺産・テオティワカンがあります。会議の前に一日余裕をもってメキシコシティに来ましたので、会議の始まる前日に会議の参加予定者10人からなるツアーに参加しました。ツアーの運転手兼ガイドに土産物屋につれて行かれ、長時間無駄になり閉口しましたが、テオティワカンは80%ほどが修復されているということで、広大な儀礼センターの全貌を見ることが出来ました。そのスケールと周囲の山々との関係など、現地に来て歩いてみてよくわかり、大変興味深いものでした。月のピラミッドの重要性などが現地で景観と配置を体験することによってよくわかりました。

テオティワカンは内陸部の高地にあり乾燥した気候です。サボテン類や低い灌木がまばらに生えた低い山々に囲まれた盆地で、ツアー参加者の一人の日本をよく知るフィンランドの建築家から、これはヤマトと同じだなといわれ、乾燥地にある石造のヤマトかなと答えました。地形的には大和とよく似ていて、周囲を囲む山々が、大和の青垣山ではなく、樹木のほとんどないギリシャなどにも見られるような裸の山々なのが大きな違いです。山



グアダラハラのバロックの裁判所の立面

の位置、形など周囲の景観をデザインのなかにとり入れ、雄大な都市デザインを構築しています。山々に囲まれた土地を意識的に選びそれをデザインに利用しているという景観に対する鋭い関心は日本と共通だと感じました。しかし、自然の風景の中に、巨大なスケールで圧倒的な石造の創造物人工の空間を作るという強烈な建設の意志が感じられます。一方、日本では難波



Teotihuacanーケツァルコアトル、太陽、月のピラミッド

宮や飛鳥の宮々あたりの時代にあたりますが、自然に溶け込んだような印象のある日本の建造物とだいぶ違うなという感じです。

テオティワカンとは紀元前2、3世紀から出現し始め、2世紀半ばには現在みられる景観を既に完成し、さらに6世紀ころには人口20万に達していたといわれています。一般の住人たちは、この儀礼センターの周囲の森の中で、日本の農家ともよく似ていて現在も地方で住まわれている木造草葺でスタッコ塗り壁の農家に住み、焼畑をして暮らしていたようです。テオティワカンの神官支配者はメソアメリカ一帯を支配していたのではないかと推定されていて、その富を背景としてこのような巨大な空間を作ることができたのでしょう。しかし7世紀に入ってから衰退し初め、7世紀後半外部からの侵略があったらしく、大規模な火災の痕跡が考古学的に確認されているそうです。この文明が以後のトルテカ、アステカ、マヤなどの原型となりメソアメリカ文明の核となったといわれています。

この文明の担い手ははっきりわからず、都市の衰退後にどこに行ったのか、消えたのかもよく分かっていないということです。しかし、テオティワカンではピラミッドの装飾にもなっている二つの主神に対する信仰があります。一つは羽根をもった蛇、ケツァールコアトルという水と農耕の神に対する信仰で、これは後にトルテカ、アステカにも伝えられてククルカンと呼ばれ、マヤにも続いています。他の一つはトラロックといい太陽を毎日運ぶ火の蛇（一説には雨の女神）に対する信仰であり、これもマヤやアステカまで続きチャックと呼ばれています。このように主たる神の信仰は、建築様式や装飾類とともに、この地域の文明を通じて伝わっていて、各文明は同じ流れのなかにあるようです。

ユカタン半島のマヤ遺跡

テオティワカンとは異なるマヤ文化の遺跡は、24日から30日までの会議後ツアーで回りました。植民地時代の美しい都市メリダを基地として、カバー、ウシュマル（世界遺産）の遺跡へいき、その後、世界的なリゾート地のカンクンへ行く途中で、イザマル、チチェン・イツァ（世界遺産）を見ました。カンクンからトゥラム、シェルハと合計六ヶ所のマヤの都市遺跡をこのツアーで見たこととなります。ツアーの最後の二日間はリゾート地のカンクンでの自由日で、美しいカリブ海で泳いだり、潜ったりをするようになっていましたが、私には興味がないので、他の重要な遺跡を見ることにしました。グループから離れ単独行動をすることにし、一泊でパレンケ（世界遺産）に行き、そこからメキシコシティ経由で日本に帰ってきました。当初はグアテマラのティカル（世界遺産）にも行きたいと思っていましたが、どこからどのように行ったらいいか、日本の旅行社でもあやふやで

よく判らず、現地の旅行社のEメールもあまり信用できず、今回は断念しました。

上記七ヶ所の内イザマルでは、マヤ遺跡のピラミッドの台の上に16世紀後半西半球最初といわれるカソリックの修道院が建てられていて、マヤの遺跡は見ることは出来ません。従って実質的にはマヤ遺跡は六ヶ所見たこととなります。

ツアーで見学した五つの遺跡はユカタン半島にあり、マヤ文化の区分で、北、中央、南の三地域の内、北部に属することになります。この地域の地形は低い緩やかな丘が続く平坦な台地です。メキシコの中央高地のテオティワカンなどよりも少しは湿潤で、雨期には雨も少し降りますが、乾燥地帯です。石灰岩からなるカルスト台地ということで、降った雨は全て地中にしみ込み、地上に川はほとんどありません。水は地下に溜まり、また流れています。時には地中の水たまりの空洞の上部の地面が陥没して、セノテと呼ばれる泉が出来ます。チチェンイツアには巨大なセノテ、聖なる泉があります。カバーでのように井戸を掘って水源としているところもあるようです。この地域ではこのように水の得られるところに都市が出来たのでしょう。このような乾燥地としての植生は低木の藪で、土地が石灰質であることも原因かもしれませんが、樹高は5mあたりから10mくらいの樹林が続き、ときおり15mくらいの樹林が一部出てくるとい感じです。都市の儀礼センターはこのような見渡す限りの樹林に囲まれた空地、いわば凹型の空洞から、ピラミッドとその上部の神殿が空中に突出しているという景観です。神の場所が、神の本来属する天に突き出ているのでしょう。マヤのピラミッドはテオティワカンの勾配の緩いものと違って、急な傾斜ですし、またピラミッドの規模も聖域全体の規模もテオティワカンよりも小さいのですが、低い樹林に囲まれているので、その突出ぶりがよく目立ちます。樹林に囲まれているのもテオティワカンとは大きく異なっています。このような森林の中の石造建造物が作り出す空間は、直感的には森林タイプの日本の凹型空間と乾燥地タイプの中東・西欧の凸型空間とも異なる中間的なものではないかと感じられました。



ウシュマルー平らな森の中からピラミッドが突出

通常は内陸にあるマヤの遺跡のなかで、トゥラムはカリブ海を望む美しい海岸の断崖の上にあり、規模は比較的小さいですが特異な遺跡です。マヤでは最も後期の12世紀から16世紀にわたり最盛期を迎えています。建築的には衰えた時期のもので、建物もあまり立派ではなく、構造的にもおかしいようです。しかしその海に面して建設されていることと、海以外の3方に城壁があることが特徴です。海の反対側の城壁の外側は、この地方の他の遺跡と同じように、やはり平坦で低い樹海が見渡す限り続いています。城壁外にも比較的広範囲にわたって遺跡が残っているようです。城壁の内は、約400m×1kmであり、全市域の約10%にあたります。城壁内には、宗教的建物、政庁などの建物と、神官など支配層の人たちの住居があり、城壁の外は階層の最も低い農民、漁民、狩人が住んでいました。この城壁は外敵に対するものというより、城壁内の人々を最下層の人々から守るのが目的であるという説明を受けました。トゥラムが栄えた時期は商業が盛んで、内陸部の諸都市

と外部との結節点となる港です。遠くドミニカやパナマやコロンビアなどの南米の北岸まで通商に通っていたといわれています。

パレンケ

旅行の最後にツアーから離れて単独行動で行ったパレンケは、私にとっては今回の旅行で最も面白かった遺跡です。4世紀頃から建設が始まり、7世紀に最盛期に入り、9世紀から10世紀に放棄された都市です。ユカタン半島北部の平坦な乾燥地の遺跡とちがって、今回私が行き損なったグアテマラのティカルなどとともに、熱帯雨林の中のマヤ文明の中部地区に属する遺跡です。この地帯は山々が濃い緑であり、40m前後にまで達する大木が茂り、比較的大きな川も流れ、滝などもあります。パレンケ遺跡の地形は日光などとよく似て、平地から山に移る場所に、山の傾斜を利用して作られており、山々や樹々に囲まれてピラミッドや宮殿、神殿がテラス毎に立体的に配置してあります。

また、現在のパレンケ遺跡への入口のすぐそばにある Temple XI と名づけられた構造物などは、まだ樹々におおわれた山としか見えず、周囲の山々のなかにもまだまだ構造物があるようです。パレンケ遺跡の地図を作成しているチームによると、仕事を始めた98年の2月の時点では541の構造物があることがわかっていたが、99年の6月には750以上あることがわかり、作業の終わる2000年の8月までには1500の構造物が見いだせるのではないかと、また儀礼センターだけでなく、都市の全体構成が見いだせるのではないかと期待しているといえます。この遺跡は世界遺産に登録されているのですが、このようにまだ全貌は明らかになってはいません。

メキシコには、スペイン時代以前のものとして、この他にも多くの遺跡があり、世界遺産に登録されているのだけでもエルタヒン、モンテアルバンなどがあります。登録されていないものにも重要な遺跡が数多くあります。マヤ文明に限っても今回見ることの出来たパレンケなどが属する中部地帯には、グアテマラに入って世界遺産・ティカルやホンジュラスの世界遺産コパンや、更にベリーズにも広がっており、今回全く見ることはできなかった南部地帯はグアテマラ、エル・サルバドルにも続いています。しかも多くの点で不明のことが多いのが実状のようです。まだまだこれから面白い発見があるのでしょうか。

このスペイン時代以前のメキシコでは、世界は三層構造になっていて、神々のいる天人々の生活する地上、地下の冥界となっています。先に記したようにピラミッドやその上の神殿が森を破って天に聳えているのはその表現でしょう。精密な暦が発達していたことは、天体観測が盛んに行われていた結果でしょう。これらのことは上下の垂直の世界意識が強くあることを示しています。日本の水平方向の世界意識とは異なるでしょうが、森に囲まれた集住の場所という点では日本と似ています。またパレンケでは川と滝のほとりに宮殿が建てられ、滝の景観を楽しみ、建物からの眺望を意識しています。この他にも全体的に、森や山との関係、風景との関係を充分意識して、注意深く建物を配置しているようです。これらのことはパレンケに明瞭に現われていますが、テオティワカンをはじめ、ユカタン半島のマヤ遺跡にも見られることです。中東や西欧の都市とはこれらの点で大きく異なるように思います。そのような点もわかり大変面白かった旅でした。



パレンケー森と山に囲まれた遺跡

総会（第1部・第2部）の主要議事

石井 昭

本稿で私が報告するのは、10月17日のメキシコシティにおける総会第1部の主要議事と、10月22・23両日のグアダハラにおける総会第2部の主要議事についてです。後者のうち本部役員の選挙についてはやや詳しく述べることにしました。その理由はやがてお分かりいただけると思います。

総会第1部

メキシコシティの都心にある PALACIO DE BELLES ARTES（国立芸術会館）内の華麗な大劇場が総会第1部のための会場でした。出席者は、組織委員会からの情報によると、登録手続を終えたイコモス会員だけで約100カ国・700余名。午前中（9時-13時）の開会式に限れば、多くの来賓や会員の同伴者たちがこれに加わりました。

〔開会式〕 先ず、前回総会（1996年、ソフィア）の議長 Todor Kretev氏（ブルガリア国内委会長）が Ramón Bonfil Castro氏（メキシコ国内委会長）を今次総会の議長に推挙し、これを受けた新議長のもとで、議事次第の提案と採択、副議長（日本代表、ロシア代表、コートジボアール代表）の指名と承認、等々が行なわれ、総会の成立が告げられました。次いで、メキシコ大統領 Ernesto Zedillo氏（代理：文化大臣）の祝辞、ユネスコ代表 Hernan Crespo Toral氏の挨拶があって、開会式の第1幕が終了しました。

第2幕へ移ると私も議長団の一員として壇上へ移動。議事次第の通り、イコモスの姉妹組織や友好団体の代表者たちによる祝辞や連帯の挨拶が延々と続きました。登場したのは ICCROM, HOLY SEA, US-AID, GETTY ORGANIZATION, WORLD TOURISM ORGANIZATION, IUCN, WORLD MONUMENTS WATCH, SAAC, 等々です。この種のスピーチは概して疎まれがちですが、いつも退屈であるとは限りません。例えば WORLD MONUMENTS WATCH の代表が「我々の目的は危機に瀕する文化遺産を救うことだ。過去5年間、イタリア、中国、メキシコ、トルコ、ロシア、その他のプロジェクトに計700万ドルを提供した。今後も毎年1回、機会を設けるので、応募して欲しい」と呼び掛けた時には、一瞬、会場にどよめきが起こったかのようでした。

〔表彰〕 長い昼休み（2時間）の後、いよいよ全体会議が始まり、冒頭、2種類の表彰が行なわれました。第1は GAZZOLA 賞で、Roland Silva 氏（スリランカ）に贈られました。連続3期にわたり会長としてイコモスの発展に献身した功績が評価されたものです。第2は名誉会員称号で、Hiroshi Daifuku 氏（アメリカ）など11人の長老たちに贈られました。これらを伝達したのは審査会代表 Saleh Lamei氏（エジプト）です。

〔特別委員会〕 次の議事は、会期中の実務を担当する特別委員会の設置でした。前日の役員会議で準備された原案に沿って、① CANDIDATURES COMMITTEE（選挙管理委員会）、② CREDENTIALS COMMITTEE（投票資格委員会）、③ RESOLUTIONS COMMITTEE（決議準備委員会）、④ PROGRAM AND BUDGET COMMITTEE（事業・予算委員会）、⑤ COMMUNICATIONS COMMITTEE（情報通信委員会）を設置することが決まり、委員会ごとに各5名の委員が選任されましたが、問題が無かったわけではありません。翌日から委員も関係者もシンポジウムに参加するため4都市に分散してしまいます。はたして任務遂行は可能なのか、と危惧する声があがったのは当然でしょう。今次総会を特徴づける「分散移動方式」は一種魅力的であったにせよ同時に非生産的であったと言わねばなりません。

〔執行部報告〕 全体会議の後半では執行部3役による総括報告が行なわれました。

会長 Roland Silva 氏は、第9回総会（1990年、ローザンヌ）で初当選して以来、3期にわたって在任し、今回をもって引退するだけに、個人的な感慨も込めて過去3年間ではなく9年間を振り返り、イコモスの組織と活動の諸般に言及しました。なかんずく、この

9年間に国内委員会の数が67から107へ、国際専門分科委員会の数が13から20へと増えた事実に触れて、イコモスは幾多の困難を乗り越え今や真に世界的な専門家集団に成長したと誇らしげに述べたことは、特に印象的でした。

事務局長 Jean-Louis Luxen 氏（ベルギー）は、やはり組織と活動の諸般に言及しましたが、論調は総じて自省的でした。個々の国内委員会には規模や能力の面で極端な格差があること、パリ本部の執行体制は依然として脆弱で機能不全を来しつつあること、世界遺産条約との関連においてイコモスが果たすべき役割は今後ますます重要になること、等を指摘したうえで、我々は国内委員会のたんなる FEDERATION ではなく緊密にして一体的な ORGANIZATION を目指すべきであると説きました。

財務部長 Jan Jessurun 氏（オランダ）は健康上の理由で欠席のため同国国内委員会を代理に立て、パリ本部の財政が最悪の状態に低迷していること、それゆえ DIRECTOR（事務長）が2年以上も空席のままであること、ICOMOS NEWS の発行といった基本的な事業さえ難しいこと、などを率直に報告しました。

総会第2部

4都市に分散して催された4日間（移動時間を除けば実質3日間）のシンポジウム（部会別セッション）が終わり、参加者全員がグアダハラに集ってきたのは、10月21日夜のことです。翌日の朝から、同市の歴史地区にある HOSPICIO CABAÑAS（旧 カバーニャス孤児院、世界遺産）を会場として、総会第2部が始まりました。

[シンポジウム総括] 4部会 - 「遺産と保存」「遺産と社会」「遺産と地域」「遺産と開発」 - からそれぞれ2人ずつ RAPPORTEUR が登壇して前日までの研究発表や討論の模様を紹介した後、共通基本テーマ「遺産の賢明な活用」をめぐって GENERAL RAPPORTEUR としての Louise Noelle 氏（メキシコ）と Christina Cameron 氏（カナダ）が総括講演を行ないました。もとよりこの種のシンポジウムを総括することは容易ではありません。私が見るところ、両氏は独自の道を選び、SUSTAINABLE DEVELOPMENT（持続可能な開発）という命題を大前提とし、遺産をどう活用すべきか、イコモスの果たすべき役割は何か、社会経済的な視点を含む新たな保存論の構築は可能か、と問い直すことによって、選択的に諸家の論説を整理・再提示しました。その労を多としたいと思います。

[特別委員会提案] 続く議事は、二つの特別委員会が提案する次期方針の審議でした。

第1は COMMUNICATIONS COMMITTEE（主査 Dinu Bumbaru 氏、カナダ）。迅速化と経費節減を目指して情報通信の改善を図りたい。パリ本部、国内委、国際専門委、各種役員、等の相互通信は既にかなり電子メール化されているが、いっそう徹底する。また、内外の利用に供すべき情報資料はインターネットに載せる。本部へリンクするシステムは既に完成しているので、国内委、国際専門委のサイトを増やすことが望ましい。－以上が原案の骨子でした。議場からは「本部の経費削減が国内委の負担増をもたらす恐れがある」「途上国の実情を考慮して欲しい」等々の意見が出ました。大筋で原案を承認。

第2は PROGRAM AND BUDGET COMMITTEE（主査 Giora Solar 氏、イスラエル）。パリ本部の財政状態からすれば直ちに新事業を企画することは難しい。収入増を図ることが肝要である。会費は本年から改定したばかりなので2～3年は据え置かねばならない。受託事業による収益や、寄付金・交付金などの獲得を、今次総会で選出される新執行部に期待しよう。－以上が原案の骨子でした。いささか無力感が漂う中でこれを承認。

[憲章・他] かねて最終草案が準備されていた二つの憲章、① CHARTER ON THE BUILT VERNACULAR HERITAGE と、② INTERNATIONAL CULTURAL TOURISM CHARTER とが、午後の会議の冒頭に上程され、それぞれ担当の国際専門委代表たる Christoph Macht 氏（ドイツ）と Hisashi Bill Sugaya 氏（アメリカ）から説明があったのち、表決に付され、満場一致で採択されました。また、憲章ではないとの理由でやや簡単な扱いではあったものの、続いて下記4種の文書も採択されました。すなわち ① RECOMMENDATION FOR THE ANALYSIS,

CONSERVATION AND STRUCTURAL RESTORATION OF ARCHITECTURAL HERITAGE, ② PRINCIPLES FOR THE PRESERVATION OF HISTORIC TIMBER STRUCTURES、③ NARA DOCUMENT ON AUTHENTICITY、④ DECLARATION OF ICOMOS MARKING THE 50TH ANNIVERSARY OF THE UNIVERSAL DECLARATION OF HUMAN RIGHTS です。これら計6種の文書はイコモス会員の総意によって承認された DOCTRINE として、今後、有効に機能することが期待されます。

〔本部役員候補者〕 上述の議事が終わった後、選挙管理委員会から次期本部役員立候補者の確定名簿が発表され、これを契機に議場の雰囲気が一変しました。立候補者の数は会長職に3名、事務局長職に1名、財務部長職に1名、副会長職（5名定員）に9名、執行委員職（12名定員）に15名です。議場では、先ず会長職候補の「政見発表」、次いで他職候補の「起立挨拶」があり、また全候補の「略歴と意見」が掲示されました。

〔世界遺産セミナー〕 この日のプログラムの最後は2時間（18時-20時）に及ぶ世界遺産セミナーでした。パリ本部に席を持つ ICOMOS WORLD HERITAGE COORDINATOR たる Henry Cleere 氏（イギリス）が、世界遺産条約の意義、世界遺産目録への登録手続、イコモスの使命、等々を分かりやすく説く基調講演を行なったほか、多くの会員、とくに中南米諸国からの参加者諸氏が熱心な質問や討論を続けました。有意義な企画であったと言えます。

〔総会決議〕 明けて10月23日、最終日は、二つの重要議事、総会決議の採択と次期本部役員選挙とを同時平行的に執り行い、所要5時間、14時終了という予定でした。しかし、先ずもって開会が遅れました。議長団一同の心配をよそに、Castro議長氏が悠然と姿を現わしたのは、10時頃であったかと思えます。

第1回投票結果 幹部4職

会長		
Carlos Flores Marini (Mexico)		142
Michael Petzet (Germany)		516
Maria Rosa Suárez Incán Ducassi (Spain)		460
- ABSTENTIONS		2
- TOTAL		1120
事務局長		
Jean-Louis Luxen (Belgium)	当	672
- ABSTENTIONS		257
- TOTAL		929
財務部長		
Giora Solar (Israel)	当	741
- ABSTENTIONS		174
- TOTAL		915
副会長		
Mamadu Berthé (Senegal)		408
Sheridan Burke (Australia)	当	555
Saleh Lamei (Egypt)		280
Dawson Munjeri (Zimbabwe)	当	553
Carlos Pernaut (Argentina)		436
Esteban Prieto (Dominica)		392
Christian Schmuckle Mollard (France)		420
Ann Webster Smith (USA)		490
Gamini Wijesuria (Sri Lanka)		265
- ABSTENTIONS		1214
- TOTAL		5013

第2回投票結果 幹部2職

会長		
Michael Petzet (Germany)	当	637
Maria Rosa Suárez Incán Ducassi (Spain)		563
- ABSTENTIONS		10
- TOTAL		1210
副会長		
Mamadu Berthé (Senegal)		375
Saleh Lamei (Egypt)		330
Carlos Pernaut (Argentina)	当	530
Esteban Prieto (Dominica)		415
Christian Schmuckle Mollard (France)	当	459
Ann Webster Smith (USA)	当	458
- ABSTENTIONS		2740
- TOTAL		5307

第3回投票結果

執行委員

Nikos Agriantonis (Greece)	当	567
Mamadou Berthé (Senegal)	当	347
Ray Bondin (Malta)	当	409
Dinu Bumbaru (Canada)	当	493
José Correa (Peru)		243
Tamas Fejerdy (Hungary)	当	364
Rosa Anna Genovese (Italy)	当	528
Aimé Gonçalves (Benin)	当	446
Todor Kretev (Bulgaria)	当	479
Saleh Lamei (Egypt)	当	385
Francisco Lopez Morales (Mexico)	当	551
Carlos Mesén (Costa Rica)		308
Axel Mykleby (Norway)	当	483
Yukio Nishimura (Japan)	当	512
Krzysztof Pawlowski (Poland)		224
Rodolfo Ulloa Vergara (Colombia)		288
- ABSTENTIONS		4259
- TOTAL		10886

決議準備委員会（主査：Ernst Gacher氏、オーストリア）は、会員諸層から寄せられた決議希望事項（45項目）を整理分類して5章28カ条にまとめ、提案書の形で議場に配布しました。各章は、①関係方面への謝辞、ならびに②イコモス自体の事業、③特定地域における文化遺産の保護、④他の組織・団体との連携、⑤前回総会決議の実現、等に関する要望から成っています。議場ではこれを逐条的に審議し、若干の修正を施したのち、採択しました。今後の措置としては、上記委員会の責任で更に文言を整え、ICOMOS NEWS 誌に掲載することが決まりました。

[本部役員選挙] 上述の審議とほぼ同時平行的に進んだのが、もう一つの重要議事、すなわち次期本部役員選挙です。隣接する別

室で、コンピューターシステムを用いた投票が前後3回にわたって実施され、逐次、その結果がメモの形で CHIEF TELLER（投票管理主任）Marilyn Truscott 氏（オーストラリア国内委代表）から議長に報告され、議長による口頭発表をもって当選者が決定されていきました。ご覧の付表は各回ごとの投票結果を示しています。

第1回投票の場合、会長・事務局長・財務部長については単記方式、また副会長（5名定員）については5名連記方式が採られました。これら幹部4職にあっては、規約上、投票総数の50%以上を獲得しなければ当選者になれません。第2回は、第1回の結果を受けた補充投票です。規約に従い第1回での最低得票者は除外されています。

他方、第3回は執行委員（12名定員）についての投票で、12名連記方式が採られ、単純上位の原則によって当選者が決定されました。候補者はもともと15名でしたが、同じ国の出身者が副会長に当選したとの理由で1名が除かれ、本人が希望したとの理由で幹部4職からの落選者2名が加えられました。どちらも規約に従った措置です。

時刻は予定をはるかに過ぎて - 大多数の人は昼食も摂らず - 16時頃になっていたかと思いますが、こうして選挙が終わろうとした時、出席者の中から重大な疑問が提起され、激しい議論が生じました。主な点は次の通りです。① 第1回投票で各職ごとの TOTAL（投票総数）が異なるのは不可解である。ABSTENTIONS（白票・部分的白票）を含んでいる限り一致すべきではないか。② 第2回投票で第1回投票よりも投票総数が増えたのは不可解である。待ちきれずに会場を去った人もいるので減るのが当然ではないか。もし数値に誤りがあるとすれば特に会長職では当選者が逆転する可能性もあろう。③ 第1回・第2回投票で副会長職の候補者別得票率はどのように算出したのか。例えば、同一候補者が第1回では490票を得て50%以下と見なされ第2回投票では458票を得て50%以上と見なされているのは不可解である。 - 議論が進むにつれ、根本原因がコンピューターシステムの不備と選挙運営の不手際にあったことが推察されるに至り、出席者の一部は選挙の無効さをも主張する抗議へと転じました。

まことに後味の悪い幕切れですが、議長裁断によって18時半ごろ閉会。真相解明と善後策をメキシコの国内委員会と組織委員会、問題はあるにせよ選出された新執行部、パリ本部事務局、等に託すことだけはおおよそ合意されました。総会後の展開？ - イコモス内部に生じた亀裂が深まりつつあり、憂慮されます。

メキシコ総会を終えて 偶感

伊藤延男

今回のメキシコ総会には、その後半のグワダハラにおける全体会議に出席しただけであった。その理由は、前号に於いて報告したように、総会の最初と重なり合った大阪での木造フォーラムに出席したためである。私は、ほとんど役員選挙の投票権を行使するためにメキシコへ行ったようなものであった。

従って、総会行事の全体について報告をここにすることはできない。総会に関連する一部の行事としても、投票期間の合間をぬって開催された木の委員会の様子を報告できるに過ぎない。木の委員会の主要議題は役員の改選だけであった。役員は全員3期満了のため、新委員長にはイギリス人ミッシェルモア氏、また事務局長にはカナダ人ポーター氏が選出された。ミッシェルモア氏は、修復事務所を経営する民間人のようであり、また事務局長と遠く離れているので運営に不安が残るが、ともかく役員の交代が無事できたことは喜ばしい。私も副委員長の責務から解放されたことになる。木の委員会には継続すべき重要議題が特にないから、新しい活動は総て新役員の発案に待つことになるが、それだけに各国の意向、意見の集約が重要視されねばならない。その意味に於いてヴォーティングメンバーの確定が急務と思われる。然るに木の委員会は、その歴史が古いため、返って規約がしっかりできていない。私は退任者として、規約とヴォーティングメンバーの件を強く新委員長に進言しておいた。

さてイコモス全体の役員の改選に当たって、コンピューターの不備から甚だしい不手際が生じたことはたいへん遺憾であった。しかしともかく、会長はシルバ氏からペチェット氏にバトンタッチされた。ペチェット氏の主張には共感する所が多く、大いに期待したい。シルバ氏は、過去3期勤められたのであるから、退任はやむを得ない。多年の重責ご苦労と云いたい。と同時に、彼については様々な思い出がある。

そもそもシルバ氏を知ったのは、スリランカの文化三角地帯（世界遺産の集合体）保存の会議にコネスコ側委員として出席した時からである。彼はスリランカの工事執行機関である中央文化基金の会長として総責任者の立場にあった。最初の頃のスリランカは貧困な開発途上国であった。彼は悪条件の中で悪戦苦闘していた。しかし近年では国の経済状況がかなり好転したこともあって、この度工事がほぼ完了に近づいたのであるが、同時に保存の原則論や施工面でも格段の進歩を遂げ、今やスリランカは文化財保存ではかなり高いレベルの国になったと云っても過言でない。国内指導者としての彼は、イコモスを通じて世界の理念を吸収していったのではないかと思う。

だがイコモス会長の立場は別でなければならない。会長は世界を引っ張らねばならない立場にある。彼はジレンマを感じていたのではないか。そのため彼のやり方には、重要な点を独断で判断し、その部分部分の実行を役員に押し付ける傾向があり、私などには不満が残った。尤も、イコモスでは誰が会長になってもそうせざるを得ないかも知れないが。

選挙が終わって喫茶室で休んでいたとき、シルバ氏が入ってきた。私は、重荷を下ろしてご苦労さんといひ、肩を揉んでやった。彼は少し寂しそうであった。

付記 去る12月、私は最後のスリランカ会議に出席した。シルバ氏は既に基金会長を退任しているが、それにしても顔を出さないのは不審であったので、尋ねてみた。

すると彼はメディカルチェックとか心臓バイパス手術とかでシンガポールへ行っているとか。確かにイコモスは重荷であったに相違ない。一刻も早い健康回復を祈る念切なるものがある。

メキシコでのイコモス総会への参加は、1996年のソフィアにおける第11回総会に続いて2度目となった。総会後の視察ツアーは私はユカタン半島のマヤ遺跡を中心としたプログラムに参加し、最終訪問地のカンクンを30日に出発し、31日に帰国した。

「Historical towns and villages」その他をテーマとするセッションはMoreliaで開かれ、私はジェネラルレポーターの一人として「An intermediate planning process to grand plan for historical city—Case study on Kyoto in Japan」というテーマで発表する機会を与えられた。このセッションの取りまとめを行ったのはメキシコの建築家 Alberto Gonzalez Pozoで、セッション後サマリーを行った。その概略は次のようである。

(1) 都市の遺産、またそれを確認し保存する手続きと方法に関する概念は、有効に発展している。有形、無形遺産の間の強い関係は、現在、個々の建築活動とともに一般的な領域においても理解が進んでいる。

(2) 住宅建築は建築された遺産で最も脆い部分を構成し、より早く腐蝕し失われている。歴史的都市・集落における観光、商業及びサービス活動の不适当的増大は、しばしば投機的な開発の結果である土地利用密度の過度な拡大とともに歴史的なファブリックの損傷・喪失と人口減少の傾向を引き起こしていることが多い。

歴史的都市・集落の人口減少を増大に反転させるための取り組みの一步が必要とされている。住居とサービス活動のための注意深い混合利用のバランスもまた、歴史的都市の生活の質の向上にとって決定的である。

(3) 歴史都市の保存は、その建築個々の調整の結果であるということではない。歴史的都市・村落の計画が、都市開発の目標、戦略、手段をコントロールし、社会・経済的な政策とプログラムを結びつけ適合させる循環的な価値評価の発展的な過程でなければならない。

(4) 都市のパターンは、歴史都市のアイデンティティをつくる最も永続的な要素の一つである。また、それは都市の歴史的価値を最もよく説明する特徴の一つである。歴史的かつ3時限的なこの特徴を注意深く分析することは、都市内の建築の保存と開発に関係する決定によりよい基礎を提供するだろう。

(5) 経済成長と環境保存の均衡を見つけた努力に端を発する持続可能な発展に関する概念は、都市の遺産保存へと持ち込まなければならない。とくに、不适当的な開発が自然と文化に脅威を与える時には、遺産と環境の保存はたがいに支え合わなければならない。

(6) 歴史都市・村落は、自然災害や人間の活動や無頓着によって引き起こされる突然の損害に傷つけられやすい。危機の予測や害を受けやすいことを緩和する判断

尺度が文化や都市の遺産を保護するために準備されねばならない。また、またそのことで歴史的建築物の特別の性質を認識する必要がある。

(7) 都市の遺産の保存は、地域社会の支持がなければ意味を持たない。このことは、ワークショップで検討されたほとんどの事例で確認された。この事実は、最も早い年齢から公式、非公式の教育課程に遺産への認識と保存関する学習を取り入れる必要性の根拠となる。

(8) 歴史都市・村落の保存における公的・私的セクターの役割に、重要な変化が起こっている。そこでの対立や時期的状態については、それぞれの国の条件を分析する必要がある。

(9) オープンスペースと建築物の関連性のデザインは、建築物それ自体における調整として重要である。公的領域の要素—街路、広場、緑地—によって出来る結合関係は、歴史都市における特徴とその意識を生み出すのに役立つ。それらは、アイデンティティの重要な構成要素となる。

(10) 歴史的な文脈に現代建築を持ち込むことは、依然として大きな挑戦である。因習的であるのも極端なコントラストを持ち込むデザインのどちらも適当ではない。歴史都市・村落において新しい開発を方向付ける見本を見つけ出すことが緊急に必要とされている。新しい建築は、歴史的な地域にたいして積極的に貢献する必要があるとともに、その文脈に応答する必要がある。デザインの質が最重要であり、譲歩は許されないだろう。

以上が、サマリーの概要である。発表者は地元メキシコのほか、ドミニカ、フランス、ノルウェー、ギリシャ、フィンランド、ポルトガル、アゼルバイジャン、キューバ、オーストラリア、アルゼンチン、スウェーデン、イギリス、サウジアラビア、日本である。他の討論者としてハンガリー、南アフリカ、スペイン、チリ、リトアニア、ブラジルのメンバーのプレゼンテーションがあった。

Alberto Gonzalez Pozoのまとめから読みとれるように、歴史都市・村落の保存はどの国にも共通して新たな建築活動のコントロールを重要な課題としている。とくに、観光開発や他の経済政策を背景にした投機的な開発による危機に対して、歴史的価値や都市のアイデンティティの継承を対置しようとする努力が試みられており、改めてデザインの質が問われている点が注目される。

その場合に、街路、広場、緑地等の公共的な空間が作り出す歴史都市・村落の構成の特徴を循環的に評価し、確認する作業の重要性がワークショップ全体を通して強く印象づけられた。

最後に、会場が天幕張りの階段状の屋外で、Moreliaの気候から判断してそれも結構ではなかったかと思われる。ただ、スライドやOHP使用時は暗転が不十分であるなど、不都合な点も少なくなかった。

メキシコにおけるイコモス第12回総会と Legislation Session について

九州大学 河野俊行

イコモス総会に初めて出席の機会を与えられたので、その全体的な印象と私の出席したセッションについて簡潔に報告したい。

開会式は10月17日にメキシコシティの国立美術院宮殿で行われた。アールデコの美しいこの劇場で、議長選出、挨拶、また挨拶という形で式典に一日が費やされた。形式がたいそう重んじられている、というのが第一印象であったが、国家、政府といった枠組みを持たない NGO であるからこそ形式が重要か、とも思われた。メキシコシティは人口1500万を数え、中産階級が育たないまま人口が増大したため、頻発するタクシー強盗、山頂までびっしり低層住宅が埋め尽くす近郊の山々等種々の社会問題を抱えており、初めての者にとってはやや緊張するメキシコ総会のスタートであった。しかしスタートは概ね順調であった。

翌10月18日には参加者全員が4つのグループに分かれて各開催地に旅立った。メキシコシティ到着時にホテルが変わっていたり、自分の予約が見つからなかったりしたが、この日は予定より1時間半遅れてバスは無事(?)出発した。われわれの目的地であるグアナファトまでは6時間余りを要するバスの旅であった。現地に到着すると、現地の迎えが着ておらず、タクシーを拾ってホテルへ向かった。私に割り当てられたホテルは総部屋数9室の家族経営のホテルであったが、欧米ではおそらく一泊400ドル請求されてもおかしくない立派な宿であり、ホテルのセレクションに問題が少なくなかった今回の総会を考えると、このホテルを割り当てられたことは大変な幸運であった。

グアナファトはかつて世界の銀の40%を産出した町であった。その当時の富は華麗なフォアレス劇場やカテドラル、町の地下に縦横に張り巡らされているトンネルに代表される社会資本に今も残され、町の中心部は世界遺産に登録されていることがうなずける美しさである。町を歩いていると、イタリアかスペインの古都にいるかのような錯覚を持つほどであった。我が国の300年後を考えたとき、これほど過去の栄華をとどめる建造物が残っているであろうかと、ふと山陽新幹線を思い出しつつ考えた。

会議自体はグアナファトの郊外にある会議場で開催されたが、組織的、内容的に問題が少なくなかった。会議当日になっても従前に送付したペーパーの写しはつくられておらず、その上1日目、2日目は通訳なしでスペイン語圏の報告が続いたため、それ以外の国の参加者は居場所がない状態であった。また私の報告が予定されていた10月20日のセッションは知らないうちに21日に延期になっており、その日だけが英仏語の通訳のつく日であった。

そのセッションは、メキシコのニュネス(法律問題等を扱う専門委員会のメキシコ・ヴォーティングメンバー・副委員長)氏が各国の史跡保存システムの比較法的検討を行う基調報告を行った。ついでドイツのフォン・トゥルツチュラー氏(同委員会委員長)が遺跡保存の経済的インパクトについて、イスラエルのコーレン氏が遺跡保存とイスラエルにおける財政的支援のシステムについて報告した。ついで河野が世界遺産条約におけるバッファゾーンについて報告した。これは、カトマンズの都市乱開発とバッファゾーン問題、奈良・京都の世界遺産登録とバッファゾーン設定の法的工夫とその限界、京都駅建設に関する公

金支出差し止め訴訟、に言及した後、イコモスがバッファゾーンを科学的に研究するチームを組織すべきであり、その成果をガイドラインとしてまとめることを提唱したものであった。私の報告は好意的に迎えられ、後のグアダハラでの選挙で副会長の一人に選ばれたオーストラリアのバーク女史にペーパーを求められたことは光栄なことであった。

ところでこの後、スイスおよびドイツの報告者によってなされた二つの報告が、内容的には「法的」問題とはいいがたいものであったことは問題であった。また質疑応答の時間がもうけられておらず、意見交換や疑問点の解明のチャンスがなかったのは残念であった。これは専門委員会とこの総会のセッションがまったく関係付けることなく運営されていることと、それを関係付けようとしたヌニネス氏の尽力が専門委員会委員長の反応の悪さのために実を結ばなかった、という点に一因があるようである。同委員会としては今後検討の必要がある、というのが参加したヴォーティングメンバーの大勢であった。

セッション終了後、4時間を超すバスの旅で、閉会式の開催されるグアダハラへ移動となった。グアダハラは人口500万のメキシコ第二の都市で、商店や人の服装からしっかり中流階級が育っているという印象を受けた。閉会式の模様、メインイベントである役員選挙については石井委員長他の参加者の報告に譲ることとする。筆者にとって興味深かったのはイギリスのクレア氏による世界遺産委員会とイコモスの実務的協同体制に関する解説であった。

1週間に及ぶ総会終了後、ポストコングレスツアーに参加し、ユカタン最大の都市メリダと保養地カンクンを基点とするユカタン半島の遺跡を巡る旅に出た。日本からは私をいれて5名のメンバーがこのツアーに参加した。ツアーの詳細は経験豊かな大先輩方にお任せするとして、私としては、マヤ文明の真髄に触れたことのほかに、先輩方とご一緒していろいろなお話を伺うことができたことが大変な収穫であったことを、特に強調しておきたい。

今回のメキシコ総会の旅は、イコモスを知る上でまたメキシコの風土文化を知る上で、私にとって大変実りの多いものであった。法律問題についてのセッションはやや物足りなさは残ったが、課題がより明らかになったことは将来の改善の道を開くものではある。2001年のジンバブエ総会にもぜひ出席したいものだと考えていることを付言して、筆を置くことにする。

第12回 ICOMOS メキシコ総会

前野まさる

アスタマニアーナで始まるメキシコ会議

今回のICOMOSメキシコ総会には大学の行事の日程のすき間を縫ってぎりぎり参加したので、十分な用意をすることなく、かつ最終日までは出席できなかった。10月15日に日本を発ち途中サンフランシスコに立ち寄り、Presidio Trustの用事を済ませ、メキシコ到着が16日昼過ぎ。東京出発前に益田兼房さんからICORP委員会に代理で出席するよう依頼があったので、その足でそのままICOMOS会場のMineria宮殿に向った。しかし、委員会は16時開催するとの連絡を受けていたのだが、どこでICORP委員会が開かれるのか事務局に聞いても「わからない」と言う。Mineriaの中庭のような所にテーブルを囲んだグループが数ヶ所あるので、ちくいち当って見たがそれらしいグループは見つからない。やっとのことでICORPのグループを見付け委員会に参加できたのは18時を廻っていた。



写真1 高級住宅街 窓のある壁は塀

翌日の開会式は、メキシコ人の友人の案内で、メキシコシティの町並みと教会の見学をしていて、けしからんことに開会式を欠席し、St. Angel教会のある地区の高級住宅街を見て廻った。

ICORP 準備会議について

18時を廻って始まったICORPの会議の出席者は、オーストラリアのRobyn Riddettさん、マセドニアのLazar Sumanovさん、南アフリカのAndrew Hallさん、カナダのDinu Bumbaruさんと私の5名で、委員会の中身は20日に行われる委員会の下打ち合わせであった。この打ち合わせでは、何をポイントに協議するかで議論し、危機時の文化財救済の訓練をどうするかに時間を費やしていた。また、「危機災害の救助に際して国益を越えヒューマニズムで当るべきだ」とのRobyn Riddettさんの発言もあった。

私は「ICOMOSは金もない上に人材も少ない。危機時には人命救助が第一で文化財の救済は二の次になるだろう。神戸の震災でもそうだった。東京では関東大震災の経験から9月1日には東京全域で防災訓練をしている上に、消火水槽を各所に設け、更に文化財防火の日を定めて文化財の防火に努めている。そこでICORPでは文化財防災のガイドラインを各国、各都市に示して、その対策をさせるよう指導すべきではないか。」と提案した。

各委員は「日本では文化財防火の日には放水銃で水をかけて訓練しているな。また、98年の文化財危機管理の会議資料は大変役に立つ。」と分厚い資料を示す委員もいた。Cherilyn Widell女史の話によるとサンフランシスコでは過去2度の大地震の経験から、文化財の災害危機の対策は出来ていると言う。一度その内容を調べたいものである。ICORPの20日の会議には出席できなかったのでどうなったかは知らないが、ガイドラインを作ることは承認されたものと思う。

移動と盗難騒動

メキシコは盗難が多いので用心するように、出発前に友人から申し渡されていた。実は18日の早朝、

それがおこった。

それぞれそれぞれの分科会は4都市に分かれて開催されるため、18日は朝9時前にHoliday Inn前に集合し、それぞれバスに分乗し出発することになっていた。8時30分頃Holiday Innに着き、西村さんを見付けたので声をかけると「今3人組にトランク1つを盗まれた。用心して」と伝えられ、メキシコの現実に触れたような気がした。ホテルの前でオーストラリアのドミセルDomiserj夫人に会ったので「ご主人はお元気？」とたずねると「今主人は荷物のことで警察に行っている」とのことDomiserjさんが荷物から目を離れた隙に、3人組の男が荷物をうばい去っていったのだろうか。メキシコの現実、油断は禁物。

スケジュールは開けても分からない国

盗難騒ぎがあったせいかどうか分からないが、9時出発のバスがなかなか来ない。10時になってやっとバスが来たが、案内がないのでバスの行き先表示を見て、先を争ってトランクをバスの運転手に渡し、すぐさま乗らないと席は取れそうにない。地元メキシコ人はさすがに素早く乗り込む。車内で世話役の女性から、MORERIAの宿をSan Joseと指示を受けたが、Mineriaで参加登録の時の宿はUnaninosと指定されたので、何かの間違えではないかと質したのだが、全く要領を得ない。どうにでもなれと、San Jose泊まりを承知する。MORELIAのCentro Historicoに着いてからも案内がなく皆はそれぞれ宿に行き、数人が取り残され途方にくれる。一人の会員が「トランクがない」と騒いでいた。乗ったバスとトランクを別々のバスにされたらしい。世話役のお嬢さんはどこかに消えて見当たらない。通行人にSan Joseをたずねると、近い所遠い所、様々なサン・ホセを親切に教えてくれる。親切さだけが身にしみて嬉しい。こうして迷っていると、同じように迷っている韓国の高さんが近寄ってきて「あなたもSan Joseか？ San Jose行きのバスが出るらしい」と教えてくれる。



写真2 San Jose から Moreria の眺望

バスにはSan Jose行きの仲間、ジンバブエのMunjeriさんと私と他の一人の3人だけしかいない。バスは郊外に出て町をはなれ荒野を走る。Munjeriさんは「これは隣町だぞ」と笑う。バスは町はずれの丘の上に出る。San Joseは町のはずれのSanta Maria de Guidoと言う丘の上のリゾート風のホテルで、4室で一棟をなし、傾斜地に10棟ほど点在している。このホテルから眺めるMORERIA市の夜景は、星をちりばめたようですばらしかった。しかし、ICOMS研究集会会場のCasa de Culturaとの往復はタクシーしかなく、15ペソス~25ペソスで毎日仲間を募り相乗りで通うことと相成った。相乗り出来るうちは良い。一人となるとメーターのないタクシー料金交渉をするのは厄介だし、メキシコのタクシーはあぶないと吹き込まれて来ているので、先ず近くのホテルに行き、ホテルのボーイにタクシーを呼ばせ料金交渉をさせた。これはうまくいき、ほられず15ペソスの安い料金で帰ることが出来た。

アスタマニアーナのヴァナキュラー会議

MORERIA会議は19日からCasa del Cultureを会場に始められた。この建築は元修道院だと言う。石造2階建てのどっしりした建築で、広い回廊のない中庭を口の字に囲む。多くの修道院に見られる屋根付き回廊のしっとりした空間はない。1階に中ホールが数ヶ所、2階には僧室が多数中庭を囲み配されている。現在は、文化事業の諸事務室に使われている。ここには大ホールがないと見えて、合同会議は

大階段の付いた裏庭に大テントを張って大会議場にしていた。急場のテントとは言え、二重天幕に天窓のある少々凝ったものであった。

会場は9時にMORERIA会議の基調講演が始まる予定だったが、これが時間になっても始まらない。9時15分頃になって演壇に2人、客席に30人ほどが集まった。やっと演壇と客席に人々が座り、プログラムが始まったのは9時半過ぎだっただろうか、実にのんびりしたものである。

会議はEugenio Perez Moutasさんの基調講演で始まった。テーマはドミニカ共和国のカリブ海との関係、建築と都市の歴史的概要について解説された。歴史地区の問題として、小地域に多くの人々が住み、経済的問題や都市設備、交通、水道、電気、舗装など都市問題、また、地震、台風、自然、火災などによる損傷の対策の問題が山積していること。新しい建築は記念物より高く景観上問題をおこしていること。歴史地区の建築所有者が勝手に外装を塗装して歴史地区の調和をみだし問題であること、更に、歴史地区の住民が地区から下町に出て行き、歴史地区がゴースト化しつつあることなど多くの問題をかかえている現況が伝えられた。ノールウェイのLarsenさんはLHASAの世界遺産について、解説と現在の都市状況が伝えられた。特に、毎年的人口増加と新しい経済の流れがラサの町の構造を変えつつある状況が報告された。

ギリシャのZivesさんはカルチュラル・ツーリズムの憲章問題と歴史地区の住民問題を取り上げた。特に、パルテノン周辺の住民が観光化によって住めなくなり、周辺が観光客の遊び場と化してしまったこと、ツーリズムが歴史的遺跡を損なう危険性を訴えた。

日本からは日本福祉大学の片方さんが京都の町家の保存について、住民による町づくりの在り方と町づくり憲章を論じられた。

大河さんは、伝統的デザインによる病院が患者に安らぎを与えていることを、ある産院建設を事例に報告された。これは民族に馴染んだ建築が如何に精神的な安心感を人々に与えるか、実例をもって論じたことが人々の関心と呼び、発表後に質問者が大河さんのところに集まっていた。

ハッピングもあった。プログラムにないフランスの発表者が突然、要旨を書いたノートを手にして割り込んできた。皆が英語で話しているのに、このフランス人は自国語で始めた。通訳ブースは少々慌てていたが。発表の論点は4つ。詳細は私の語学力の限界で分からないが、先ず1) 歴史的町の危険性、2) 経済的危険性、3) 社会的危険性、4) リニューアルと近代建築、これらについて何が歴史的遺産なのか議論する必要がある。と言うものであった。この指摘は多めに議論すべきことだとも思うが、まあなんとフランス人の勝手なことよ。

この日の夕刻、別のプラザでメキシカン音楽を肴の立食パーティー。帰り際にヴァナキュラーの委員のOrga Oriveさんからヴァナキュラーの委員会は21日朝9時と伝えられる。これがまた後で問題になる。

20日ヴァナキュラーの研究会はテントホールの脇の中会議室で始まった。9時のアナウンスがあっても始まりは9時半、全てがおせおせになり遅れ気味になる。加えて室内の反響がすごく音響は最低。メキシコ人発表者はスペイン語で発表し時々英語通訳が入る。昼には終わらず2時過ぎまで続く。

4時に残りの発表が予定されていたので4時もどるも、会場には誰もいない。習慣通り30分遅れてメキシコの発表、会場には10人ほどしかいなく、丸でラテンアメリカ・コミュニティである。発表の内容も学生の調査報告レベルで面白くもない。司会者が私に「分かりますか?」と英語で聞くので、私はイタリア語で「何にも分からない」と答えたら、やっと英語の通訳が入った。それも一人半。



写真3 Casa del Culture

ヴァナキュラー委員会

2人の発表が終わってがやがやしたので、休憩かと思ったらヴァナキュラー委員長のMachatが来て、4時半からヴァナキュラーの委員会だと言う。確かOrga Oriveさんから21日9時と聞いていたのに、一

体どこが総括しているのか全く分からない。先ず、Machatさんの挨拶、「55カ国中15カ国しか出席がない。各国熱がない」と先ずは苦言。次いで、今までの経緯を長々と説明、少々うんざりする。

各国参加者の自己紹介と委員交替の紹介を終え、チャーターガイド協議に入ったとたん、イスラエル委員が何やら見直しの意見を述べ始めぐちゃぐちゃになる。

情報交換について、CIAVのホームページですることになっているらしいのだが、CIAVの各国のAVレポートが5カ国ほどしか出てなく、再三催促してもだめである由。どうやらMachatは事務処理が下手らしく、実質の事務処理はフィンランドのKirsti

Kovanenがとっているとか。2000年の会合は5月にギリシャで行うことが決まり散会した。

感想：こんなぐちゃぐちゃな遣り取りをしなければならぬのかと思うと、語学力の不足を痛感じ気が重い。

コンピューターはすでに壊れていた？

21日午後は、全員がGUADARAJARAに移動し、総会に参加することになっていた。午前中、韓国の高さんと一緒にMORELIAの石造建築の見学会に参加した。これは結構楽しかった。午後高さんはSan Joseに一旦もどり荷物をまとめてどこか集合場所に行き、GUADARAJARAに行くと言うので、私も宿までお供をすることにした。San Joseにはすでにバスが1台用意されていて、2時出発だと言う。しかし、3時、になってもバスは出発しない。メキシコのOrga Oriveさんを待って出かけると言う。肝心のOrgaさんは4時、5時になっても戻って来なかった。6時だったろう、息を切らせてOrgaさんが戻ってきた。「どうしたのか」と待ちくたびれた連中が聞くと「コンピューターがフリーズしてどうしても働かないの、朝から今までかかったの」との由。その時Orgaさんは「直った」とは言わなかった。「アスタマニアーナ」で諦めて宿に戻ったのだろう。

22日の役員選挙はコンピューターの誤作動で散々だったと聞くと、メキシコICOMOSはコンピューターを遊ばせておくほど余裕はないと想像すると、MORELIAの故障したコンピューターも一緒に組み込んだのじゃないかな？実は、私がメキシコに持っていったノートパソコンもメキシコで故障してしまった。

今回のメキシコICOMOS総会はメキシコの一つの現実を知る良い機会だった。



写真4 ヴァナキュラーの中会議場

文化観光専門委員会報告

宗田 好史

文化観光専門分科委員会の 1999 年年次会は、グアルダハラ市で 10 月 19～22 日に 4 日間にわたって開催された。今回の総会で採択された新「文化観光憲章」のために、1996 年から 4 カ年に渡り、論議が尽くされてきた。今回は、その経緯もふまえて、1998 年のノルウェー・ロロス、1997 年のポルトガル・モンテモロノボの委員会の議事録が回覧され、議論の経緯を振り返ることができた。また、今回の委員会では、憲章採択後の活動に委員会の議論が集まった。

この他、20 編の発表要旨が用意され、4 日間の期日の 2 日半を費やして、報告会が行われた。日本からは、石井 昭日本イコモス国内委員会委員長及び宗田が出席した。

研究報告会の報告：

今回は南米アルゼンチン、パラグアイ、メキシコの報告が多いのは当然であるとして、英国の研究者の出席・発表が多かった。報告の中では、観光の対象となる文化遺産に、文化景観、歴史街道、歴史的都市全体、パフォーミング・アートなど新しい分野を取り上げ、観光のあり方を述べたものが多かった。次に、文化観光情報システムや考古・歴史学成果や保存科学を分かりやすく観光客にドキュメンテーションする手法に関する報告が目立った。この関係もあり、会場では同時開催されていた写真測量専門分科委員会のパネルが展示され、また同委員会の講師による最新の成果報告も行われた。

報告の中でも、特に議論が沸いたの点は、先進国では文化遺産と一般市民・地域社会（コミュニティ）との関係を発展させる可能性についてである。単なる観光でなく、地域住民や旅行者が体験・経験・交流が図れる工夫についてである。ドイツ・マインツ付近の城郭と集落遺跡では、一般の訪問者が発掘作業を体験し、遺跡への理解を深める活動が報告された。この他、イタリア等の報告もこの種の事例であった。

一方、発展途上国では文化遺産周辺の地域社会の無形文化に対する配慮に関するものが多かった。地元メキシコ・ユカタン半島では、カンクンを中心としたマリン・リゾートの発展で急激に増えた観光客に、地元のチチェン・イツァ等、マヤ文明の遺跡の整備が追いつかない危機的状況が報告された。遺跡だけでなく多様な地域文化、民族文化遺産への取り組み、まず保存そして認識を高め、相応しい観光形態を求める必要性が論じられた。

この点、文化遺産の保存と持続可能性という視点は、文化観光憲章にも述べられている内容にも深く関わっている。この他にも、世界各地の現場で起こっている問題が、若手の研究者によって数多く報告されていた。残念ながら、アジア・アフリカ・北米からの報告はなかった。この委員会の活動範囲が地域的に限定されている感をもった。

この専門分科委員会で、今後これ以上にこの文化観光という大きな課題に関して議論が深まるかという点には、疑問を持たざるをえない。1972 年の「文化観光憲章」に始まる 30 年近い長い歴史をもつこの委員会は、文化と観光という、それぞれ中間的である意味では曖昧な課題にその困難さをもっている。現在の主なメンバーを見ても、考古学、都市・地域計画、歴史学、人類学など多様な分野に渡っていることが議論を分かりにくくしている。

また、対外的にみても、イコモスを通じてユネスコとの関係があるものの、他方で WTO に代表される国際観光機関・組織とのつながりも強いようである。そのため、主な報告内容のそれぞれの視点にもこの曖昧さが見受けられ、専門分科委員会自体の性格についても曖昧さを否めないとの印象をもった。したがって、基本的な問題意識にもずれがあるように思える。ただ、国際社会の観光への関心の高まりで、後述するが、この委員会に活動の

機会が豊富にあることは疑いがない。

研究報告を聞いた印象では、先進国と発展途上国との間の関心と問題意識の違いも曖昧さに関わっていると思われる。先進国では、文化遺産のより文化的な意味を観光客とともに問いつづける方策に関心が集まっている。しかし、発展途上国では観光客の文化遺産への理解が不十分な状況があり、遺跡側にも観光産業側にも問題がある。中南米の文化遺産では、観光客の増加への期待も少なくない。この違いは無視できないほど大きい。今回の文化遺産憲章採択に引き続き、今後の専門分科委員会の活動に関心が持たれる。20編の報告要旨と飛び入りの報告を加え、数多くの成果の中には、斬新な視点をもったものも少なくない。すでに述べたように、この分野は中間領域的であるだけに、文化観光の諸問題に関する広範な議論が求められることはいうまでもない。この委員会が発展するためには、今後の他の専門分科委員会、あるいは他の学問領域との交流が望まれるところである。

委員会の活動に関する議論：

研究報告に加えて、委員会年次会として決められた主な点を報告する。

(1) 憲章採択後の活動について、

まず、憲章の出版は未だに予算の目処が立っていない。すでに委員会で合意されているように、憲章の全文とその制定経緯に関する小史を添えたテキストと、憲章の原則だけをとりあつかったパンフレットの2種類の印刷物を準備する予定である。資金は、現在EU・ユネスコ・WTOの三者に依頼している。ただし、WTOについては最近世界文化遺産のサイトでの観光とその管理に関するハンドブックを出版したばかりであるため、難しいだろう。また憲章の出版は、最低3つの言語、英仏西語でなされることが確認された。

次に、他の関係機関との連携活動について、特にユネスコとWTOへのリエゾン活動が検討されている。さらに、イコモスの他の専門分科委員会との連携について、具体的には歴史街道専門分科委員会からは2000年10月21日に合同で国際専門家会議を開催することが提起されている。また、歴史的庭園・文化景観専門分科委員会と航空測量専門文化委員会からも上記の国際会議への参加が予定されている。

(2) 1999年年次総会以後のメンバーの具体的な活動について、

文化観光憲章の策定に関わる経緯について小史をまとめる。同じく「グロッサリー」案を作成し、委員会メンバーの回覧を経て、用語の統一を図る。また、世界遺産のサイトに関する評価の過程で、文化観光の視点からの評価基準を設けよう提案をしている。

(3) 今後のプログラムについて、

- 1) 米国イコモスの文化観光委員会では、2001年秋に文化観光に関する国際会議を主催する予定である。この専門分科委員会が共催することが求められ、承諾の予定である。
- 2) 2000年11月6-8日にブダペストで開催される第二回世界観光と貿易会議で、文化観光2000をテーマにする。
- 3) これに先立ち、ブルガリア・イコモスは2000年春に、歴史街道専門分科委員会の開催にあわせ、文化観光委員会のメンバーも参加するように呼びかけた。
- 4) ユネスコ・バンコック事務所がネパール・カトマンズで2000年4月1-15日に文化観光研修が開催される。
- 5) イコモス文化観光専門分科委員会の次回の年次会は、ギリシャのデルファイで2000年の10月7-9日に開催される予定である。2004年のギリシャでのオリンピック開催に関わる観光問題について、地元団体の含めて議論する機会となる。ギリシャでの年次会開催が困難な場合、コスタリカはIFLA会議と併せて年次会を受け入れる用意がある。このように、文化観光に関する国際会議は今後も頻繁に開催されることは注目に値する。

第12回イコモス総会メキシコ大会に参加して

イコモス執行委員 西村幸夫

第12回のイコモス総会は1999年10月17日から23日まで、メキシコで開催された。ラテンアメリカで開かれた初の総会である。この会議に日本から参加した一員として、主として国際科学シンポジウム(International Scientific Symposium)について報告したい。

イコモス総会の際に、集まった世界の専門家によって3日間程度のシンポジウムが開催されるのは通例となっており、この専門的なシンポによって総会は単なるセレモニーや役員選挙という儀式を越えて、学問的な知識の交流の場となることが可能となっている。筆者は3年前の第11回ソフィア総会に続いてメキシコ大会でもひとつの分科会の報告者として指名され、発表論文の選択から当日の発表の記録、そして総会の席上で分科会の模様を報告するという役割を果たすことになった。

今回のシンポの最大の特徴は4つの分科会がそれぞれ別の都市において開催されたことである。これはメキシコ国内委員会としては多くの都市に国際会議を誘致することができたという意味では意義があったかも知れないが、訪れる海外の専門家には移動の手間や他の分科会の議論を傍聴できないなどの問題があり、残念ながら不評であった。4つの都市とは、メキシコ・シティ、モレリア、グアナフアト、そしてグアダハラハの4つである。いずれの都市も世界遺産を有しており、観光的な意味では参加者は満足したかも知れないが…。

4都市それぞれに議論のテーマが設定された。すなわち、メキシコ・シティでは「遺産と保全」、モレリアでは「遺産と地域」、グアナフアトでは「遺産と社会」、グアダハラハでは「遺産と開発」である。また、4都市のいずれかに各専門の国際科学委員会(International Scientific Committee)が割り振られ、そこで委員会が開催されるという仕組みになっており、分科会はいくつかの委員会の議論の場の集合体ともいえるような形式となっている。委員会の構成は、メキシコ・シティが考古学、水中考古学、構造、危機管理の4委員会、モレリアが歴史的都市および集落、民家、土建築、木、石の5委員会、グアナフアトが保全経済、教育、法制、産業遺産保全、文化的ルートの5委員会、グアダハラハが壁画、文化観光、史跡及び庭園、写真測量、20世紀建築の5委員会である。

都市ごとのテーマと委員会の設定が必ずしも整合していないので、結果的に都市ごとのテーマが宙に浮いたような形になってしまった。

各委員会の通常の活動形態はまちまちであり、なかには活動が停滞しているものもないわけではない。こうした委員会の議論は、どちらかというところそれぞれの学術論文の発表会の様相を呈している。対して活動が活発な委員会の議論は、もちろん論文発表とそれに続く議論もあるが、それだけではなく、今後の活動方針やチャーター制定の議論などがおこなわれ、活気に溢れている。4都市すべての発表をカバーすることは物理的に不可能なので、ここでは筆者が担当したグアナフアトの模様を中心に、他の都市の報告者のレポートも利用しつつ、やや一般化してシンポジウムの傾向を報告したい。

シンポジウムを通じていえることは、第一に「文化遺産」の概念を拡げていくことに關して熱心に多様な試みがなされているという点である。例えば巡礼路やシルクロードなどを対象とした文化的ルート(cultural routes ただしフランス語では itineraries culturels)や水中考古学、20世紀建築などの新しいジャンルに多くの研究者が関心を示し、数多くの事例とともに「文化遺産」の概念が徐々に拡大していく様子を目の当たりにすることができた。

研究者の知的な関心がこうした概念の拡張に向かうのは自然の性向だといえようが、数多くの事例研究が続けてこのようなチャレンジを続けていくさまを目撃することによって我々に快い知的興奮をもたらしてくれる。

第二の特徴は、当然のことながら、特定のカントリー・レポートやプロジェクト・レポートが多いことである。専門家による情報交換という意味ではそれぞれの国独自の事情を世界に報告することはそれ自体意義があるといえるが、ただそれだけに満足しているのでは良くないと思う。単なるカントリー・レポートを越えてより普遍的な意義を提唱するような報告や、これまでにない新しい手法や考え方を紹介するためのレポートである必要があるだろう。また、文化遺産の概念を拓げることに一役買うような論文やイコモスの将来的な行動指針となるような提言が含まれていることが望ましい。報告者としても、単に自分の国の事情を紹介すれば役目を果たせらるだろうと紋切り型に考えるのではなく、どのようにイコモスの活動に貢献できるかを考えて内容を詰めることが望まれる。

第三の特徴は、緊急アピールの存在である。たとえばグアナフアトではペルーのマチュピチュ遺跡周辺にケーブルカーを建設する計画があることが報じられ、遺跡の危機が声高に論じられた。シンポジウムの本来の目的はこのようなアピールを出すことにあるわけではないが、実際に現場の当事者のスライドによる実状説明と嘆願の訴えを聞くと、ことの重大さがひしひしと伝わってくる。こうした訴えはやはり、言葉だけでは伝わりにくい。現場の肉声と実際のスライド上映が最も雄弁に現状を語ってくれる。こうした訴えに耳を傾けるのも国際的なシンポの役割だろう。その意味では今回の国際シンポはその役割を果たしていたといえる。

4都市に分かれて開催された分科会が終わり、一同グアダハラに集結して、ふたたび総会が始まった。その冒頭、分科会の報告がなされ、筆者も報告者として壇上に登ったが、時間的な制約もあり、分科会の簡単な紹介をするにとどまった。主催者としては、具体的な報告だけでなく、総括的な議論がなされるような工夫も必要だろう。また、それぞれの国際科学委員会の活動の報告と分科会での議論の報告があると、参加者にとって委員会の活動内容を知ることにもなり、よかったかもしれない。

しかし、今回のメキシコ総会は全体的に、メキシコ当局の準備不足が目立ち、各分科会会場の設営も混乱を極め、事前に提出されていた論文をまとめた論文集も刊行されず、梗概集も発表が終了した後の総会時点でようやく配布されるという始末で、こうした困難な状況の中、まがりなりにも論文発表と討論が実施され、総会に概要が報告できただけでもよしとしなければならないだろう。

メキシコ総会までの3年間のイコモスのテーマは遺産の賢明な利用 *wise use of heritage* であったが、結果的に何ら具体的な成果を挙げられずに終わったという印象が強い。その前の3年間のテーマがオーセンティシティであり、これはいわゆる奈良ドキュメントという成果を生み、世界遺産の評価の際にも参照される重要文書として定着しているのに比較して、やや寂しい。これから3年後のジンバブエ総会までのテーマは今のところ未定であるが、ジンバブエ総会自体のメインテーマは無形の文化遺産 *intangible heritage* であるので、これに関連したテーマが選ばれる可能性が強い。イコモス自身、ヨーロッパとそれ以外の地域での文化遺産登録件数のアンバランスを是正するために、無形の文化遺産を積極的に評価しようという姿勢を強めている。この問題の中心にはアフリカの文化遺産をどのように正当に評価するかという問題意識があるが、これはアフリカに限った問題ではない。アジアにおいても同様に重要な課題である。1950年の文化財保護法制定以来、無形文化財というカテゴリーを育ててきたわが国にはこの問題において世界をリードしていく力と情報が蓄積されている。日本のイコモス国内委員会としても存在感を発揮するいい機会が訪れつつあるといえる。

イコモス第12回総会（メキシコ）に出席して

大河 直躬

I はじめに

イコモス総会に出席するのは、前回 1996 年のソフィア（ブルガリア）に次いで二度目です。私が委員を務める CIAV（イコモスの Vernacular Architecture に関する国際専門分科委員会）が期間中に開かれることと、エキスカーションでマヤ遺跡を見られるという魅力もあり、はるばる出掛けることにしました。中米地域は、昨年にサント・ドミンゴ（ドミニカ共和国）での CIAV の総会に出席したのに続き二度目ですが、自然も建築もカリブ海地域とはまた違う特色があり、興味深い旅でした。

10 月 14 日に成田を出発し、途中の乗換を兼ねてサンフランシスコで 2 泊し、16 日の夜にメキシコ・シティに着きました。案内されたマジェスティック・ホテルは、大聖堂前の広場に面し、1937 年建設後ほとんど改造されていない建物で、部屋の窓から大聖堂も見え、早速メキシコの気分を味わいました。

17 日のメキシコ・シティにおける総会、18 日からモレリアに移動しての専門分科会、22 日と 23 日のガダラハラに再集合しての総会は、日本から参加された方々とともに行動し、興味深い毎日を過ごしました。30 日までのエキスカーションはマヤ遺跡を巡るコースを選びました。これも土井崇司・片方信也・荒木伸介・河野俊行氏と同行でき、遺跡の見学の他にメキシコの郷土料理の探索も楽しみました。

もちろん CIAV の旧知のメンバーと再会したり、各国から来られたいろいろな文化財保存の専門家と知りあうことができたのも、私にとって貴重な収穫でした。

総会と、Vernacular Architecture 以外の専門分科会の内容については、他の参加者が詳しく報告されると思いますので、以下では Vernacular Architecture の分科会、CIAV の委員会、それにエキスカーションの印象を簡単に述べます。

II Vernacular Architecture に対する各国の取組み

4 都市に分かれて開催された専門分科会のうち、Vernacular Architecture の分科会は、歴史的な町と村落・木造・構造などの分科会とともにモレリアで開かれました。

モレリアはミチョワカン州の州都で、メキシコ・シティの西方約 200 キロの高原地帯にあります。両都市間の移動はバスで約 6 時間かかりましたが、コニーデ型の火山の間に広がる高原を縫って進むバス旅行では、いかにもメキシコらしい風景が楽しめました。休憩で下りた道端には、野生種のヒマワリやコスモスが繁茂しています。高地は樹木が少なく、低地の湖水のほとりに集落があります。

1991 年に世界遺産に登録されたモレリアは、16 世紀に建設され、元はバジャドリと呼ばれましたが、メキシコ独立の英雄ホセ・マリア・モレーロスの生地であることにちなみ、改名されました。町並みはスペイン時代の面影をとどめた建物が多く、大聖堂・州庁舎・大学等は立派な建物です。

分科会の会場はかつてのカルメル会修道院の建物で、現在は文化センターに使われています。チャペルはかなり古い面白い建物で（写真 1）、会場はその後方の僧院の中庭にテントを張って設営され、CIAV の委員会とワークショップが開かれた小規模の部屋は元の食堂らしく、「最後の晩餐」の壁画が正面の壁に描かれていました。

Vernacular Architecture の部門の発表は、本会場で 8 題、ワークショップでもほぼ同数の発表がありました。運営で解せなかったのは、本会場では同時通訳があったのに、発表者の多くが中南米諸国からで、スペイン語による発表が多かったワークショップには同時通訳がなかったことです。また予めプロシーディングの原稿が提出されていたのに、本会場の分は印刷物がなく、ワークショップの分が立派な冊子になっていました。そのような事情か、ワークショップでは聴衆が減りました。

発表の主題は様々で、ギリシャの民家へのギリシャ・ローマ、バルカン地方、イスラム文化圏の影響の分析や、フォトグラメトリーのロシアや日本民家への適用例を紹介するような、民家の研究と調査に属するものと、現在の保存のアクチュアルな課題を論じたものが入り交じっていました。

後者のなかでは、リトアニアの J. Markeviciene の保存における価値のカテゴリーの大胆な展開、地元メキシコで最近積極的に着手されている Vernacular Architecture の調査・研究についての Valeria Pieta の紹介、ブラジルで少数民族の居住地の計画 (Indian Habitat Project) に携わっている Jose Luiz de Carvalho の報告が目されました。Carvalho は若い地理学者で、Ethnoecology という日本では聞き慣れない概念を使っていることが私の注意を引きました。



1 モレリアでの分科会の会場に使われた文化センター。
元はカルメル会の修道院です。



2 モレロスの旧居（モレリア）の中庭を囲む回廊。
前野まさる氏と土井崇司氏の姿が見えます。



3 モレロスの旧居の裏手にあった古い台所流し。
この他に石造りの洗濯流し等もありました。



4 モレリアの州庁舎の回廊の修復工事の現場。大引の
仕上げに、日本と同じ姿勢で斧を使っています。

私の報告は本会場での報告の一番最後の順番になりましたが、最近の日本における民家の所有者による活用の活発化と、登録文化財制度の進展状況を紹介しました。スライドで説明した、土蔵を活用したカフェ EF（東京都台東区）と、吉村医院（岡崎市）における自然分娩のトレーニングへの農家の活用や伝統的木造による新しい産院の建物は、幸いにもかなりの人の関心を引きました。

発表終了後、Valeria Pioto と Jose Luiz de Carvalho がコンタクトを求めに来られ、ジンバブエの Lauson Manjeri と、カナダの Marc de Caraffe から口頭発表の原稿コピーを求められました。Caraffe は、国内の少数民族居住地の保存のマニュアルを作成中で、その参考になると述べました。

このような反応からも伺えるように、Vernacular Architecture の保存が現在大きな課題になっているのは、開発途上国と少数民族を抱える国々です。それに比べて先進国では関心が低いようです。このことは、昨年サンクト・ドミンゴのシンポジウムでも感じました。

CIAV の委員会は、20 日の夕方に開かれ、今年から Voting Member になられた前野まさる氏とともに出席しました。これまでの主要課題であった Vernacular Architecture の保存についての憲章が総会に提出されることになったので（22 日の総会で採択）、世界民家図集の刊行等の今後の作業や予定が話し合われました。来年の CIAV の総会は、5 月にギリシャで開催されます。

民家図集はまだ原稿の集まりが遅れていますが、その印刷見本として、日本から提出したものが配られました。日本の民家の修復工事での図面の精密さが評価されたのでしょうか。

以上のように、Vernacular Architecture の保存という課題は、イコモスのなかでもかなり重要なものであり、毎年の CIAV の総会と、それと同時に開催されるシンポジウムでも熱心に討議されています。なかでも特に熱心なのは開発途上国や、少数民族を多く含む国々（カナダ・オーストラリア等）です。それに比べると、先進国はあまり熱心でないように感じますが、そのなかで日本は保存と活用の両方の面で活発に前進しています。このような世界の状況のなかで、今後の日本が果たすべき役割は非常に大きいと思います。



5 バスのなかから見た茅葺きの農家。正面は入口の他に開口部がなく、おそらく1室住居でしょう。



6 ドライブイン・レストランの前で、土産物をかざすマヤ民族の後裔の人々。

Ⅲ メキシコ各地で見たこと感じたこと

外国旅行では、予定や期待をしていなかったことに会うのが楽しみです。またメキシコの都市は外国人観光客が多く、表通りのレストランや商店はつまらないですが、地元庶民で賑わうメルカト（市場）や食堂は面白く、同行の方々としばしば行きました。それらのいくつかを紹介しましょう。

モレリアにはモレロスの旧居が2軒保存されています。2階建の立派な方は、1801年に購入して2階を建て増したもので、当時の上級市民の生活がよく分かります（写真2）。裏手には、当時の古い流しが残っていました（写真3）。

州庁舎では、中庭を囲む回廊が修復中で、天井の大引（2階の床も支える）の仕上げは、墨糸を掛けて、日本の「はびろ」と同じような斧を同じ姿勢で使っていました（写真4）。

モレロスの旧居に近い伝統料理の看板のある庶民的レストランは、前野・土井氏と何回か行きました。日替わり定食のメニューが読めず、最初はまごつきましたが、最後は珍しく美味しい地元料理に出会えました。店の内部の作りや、入口に張られた「あてむき」も珍しかったです（写真7・8）。

エキスカションのバス移動の途中で、茅葺きの農家の集落の脇を通りました。バスのなかから、止めて見学させてほしいという希望ができましたが、住民を刺激するという理由で実現しませんでした。元の形を良く残しているものを、バスの窓から写真に撮りました（写真5）。外壁の構造は、縦に細い丸太を密に並べて土を塗っています。

ウシュマル・チチェンイツァ・トゥルムなどのマヤ遺跡は、規模も表現力も思った通り圧倒的でした。目地を使わずに石を積み上げた構造も、なかなか工夫がしてあります。

残念に思ったのは、見学者の大部分が外国人で、メキシコ人と思われる人が稀だったことです。同行の方とどの程度の比率だろうかと議論して、1パーセント以下だろうという結論になりました。マヤ民族の後裔と考えられている地元の住民はドライブイン・レストランから排除されており、駐車場のロープの外側で、彼らが土産物を頭上に掲げている様子を見て、なんともいえない気持ちになりました（写真6）。

このような途上国等の世界遺産の現状は、総会でも問題にされましたが、イコモスの今後の大きな課題でしょう。（終）



7 モレリアの庶民的なレストラン。壁に接した炉でトルティーヤを温めて供していました。



8 レストランの入口にあった手作りの「あてむき」。昭和40年代まで駄菓子屋等にありました。

イコモスメキシコ総会に出席して次の2点について報告いたします。

1. イコモスメキシコ大会の運営及び専門委員会の成果

今回初めてイコモスの総会に出席しました。

去年、急に新しい専門委員会カルチュラルルートのメンバーになったことから、今年にはスペインで開催されたカルチュラルルートの会議に出席し、初めてイコモスに国際的に係わることになった。

本総会では選挙のためと、また専門委員会のワークショップで、カルチュラルルート専門委員会の会長より、スペインでのさきの委員会の会議で発表したペーパーを、再度報告するよう、直前に要請され、3枚程度のペーパーにまとめ、あわただしく用意して参加した。

9月のはじめ原因不明のめまいで3日間ほど入院した後で、まだ体調に不安が残り、メキシコ行きはためらわれたのだが、思い切って参加した。同行の日本イコモス国内委員会のメンバーの方々とりわけ、西村幸夫教授、河野俊行教授には色々とお世話になり、この場をお借りして感謝申し上げる次第です。

メキシコでの総会は、次の点であらゆる会員に、総会の運営に対する不満を与えたものであると感じた。

とりわけ、会場が4ヶ所に分かれ、大距離の移動を強いられ、インフォメーション等あらゆる面で不備があり、不便を感じた。

少なくとも1000人規模での会議を不備なく開催することは至難であるが、やはり便利な設備が整っている場所で開催されることが望ましかった。

また、専門委員会の討議とワークショップの会場を分散させたことにより、移動に時間を要し、エクスカーションの用意もなく、また会場での同時通訳が一部の会場でしか行われず、言葉のトラブルは研究発表、報告と議論への理解を著しく低下させた。今後は全会場に同時通訳を準備されることを要請したい。

17の専門委員会とイコモスの20のワーキング・グループによるワークショップは次のように4会場に分散して行われた

MEXICO (メキシコ) 会場は、Archaeology, underwater archaeology, structures, risk management,

GUANEJHATA (グアナファト) 会場では、the economic of conservation, training, legislation, cultural routes,

MORELIA (モレリア) 会場ではhistoric cities, vernacular architecture, wood, earthen structure, stone,

GUADALAJARA (グアダハラハラ) 会場においては、mural painting cultural tourism, historic sites and gardens, photogrammetryの討議がなされた。

その他、グアナファトではthe conservation of industrial heritageが、またグアダハラハラではthe architecture of the 20th centuryの2つの討議がなされ、これは新しい委員会となるようである。

筆者は、西村教授、河野教授とともに、グアナファト会場に参加した。

専門部会には、スケジュールの組み方等によって、自分の属する専門分科会のみへの参加しか可能でなかった。筆者の属するCultural Routes委員会(CIIC)は、会期中3回の会合と研究発表が行われた。

同委員会の2000年の国際会議の日程は6月にブルガリアにて「普遍的背景における無形文化遺産とカルチュラルルート」の2つのテーマでセミナーを開催することが最初のミーティングで決定された。

また、研究発表は分科会会長のマリア・ローザ女史よりCIICの組織、設立の経緯、CIICの役割及びカルチュラルルートの定義についての報告があり、スペイン、メキシコ、ジャマイカ、オーストラリアの代表者からの発表の後、会長の指名により5人のショートペーパーの発表が行われた。筆者は会長の要請により「CIICの目的、及びカルチュラルルートの対象及び定義の確立に対する指針」について報告を行った。

残念ながら他の分科会の報告を傍聴することは出来なかったが、半日ほど世界遺産に登録されているグアナファトの美しい高原の町中世的街並みを探勝することができた。

特に、強くスペインの影響を受けて丘陵上に成立した城郭的な町並み、その下を迷路のように網の目状にめぐらされている地下道路の交通網に見る賢い都市計画は、今日では非常に面白い観光資源となっている。とりわけ、夜の照明下の石畳の道と町並みは一段と魅力的で、今回のメキシコ滞在中グアナファトでは楽しい一時を過ごすことができた。再訪したい町であった。

2. イコモス第12回総会における国際役員選出選挙について

会長選挙は3人の会長候補者、メキシコのCarlos Flores Marini、スペインのMaria Rosa Suarez Inclan Ducassi及びドイツのMichael Petzetによって戦われた。

とりわけ有力候補のドイツのMichael Petzet氏とスペインのマリア・ローザ女史のどちらが勝っても双方に深いしこりを残すであろうといわれていたが、選挙は信じられない前代未聞の稚拙な投票システム（コンピュータを使用した投票）とずさんな管理によって、無惨な結果をもたらした。

イコモスの組織への信頼と主催国の総会運営の不手際が露呈し、イコモスが抱える根深い様々な問題点が噴き出してしまった感がある。イコモスの威信と信頼を一挙に失ったようだ。

投票結果はコンピューターによる投票という科学的方法を導入したにも係わらず、大きな疑念と疑惑を残した結果となった。

会長選出は1回で決定されず、2回目で2人の会長候補者による決選投票となった。

第1回目の結果発表まで長時間を要したため、第1回の投票の後、かなりのポーティングメンバーは帰国してしまっているにもかかわらず、2回目で算出された投票数の総数は1回目に比べて90票も大幅に増えていた。

このことについては、イコモス事務局と総会の事務局長は、責任は投票と管理責任者であるマリリン・C・トルスコット氏にあるとし、一切の責任を拒否した。これに対してトルスコット氏は投票は正しく行われたと口頭で断言しただけで明白な説明は一切されなかった。

敗者となったマリア・ローザ女史は、コンピュータシステムによる投票に対して、システムプログラム上の問題、あるいは開票にミスが発生したことが十分想像されるとして、これの立証確認を申し出た。あわせて総会で正式に登録され信任された投票権を持つすべての代表者のリスト、投票委任リストの提出も要求したが拒否された。

マリア・ローザ女史は、第1回目の全投票数の48%を得ており、この要求は受け入れられるべきであったと後述している。

本選挙の疑惑をマリア・ローザ女史が次のように述べている。

1) 投票プロセスを記憶している電子メモリーのアウトプットを提出することは不可

能であると当局は回答した。

- 2) 確認を行うことができる証拠となる資料は一切ないと当局は回答した。
- 3) 会長に選出された側は、これらに対して説明を求める敗者に対し、不寛容であると激怒した。またこのことは、次回マラケシで会合が行われる予定の世界遺産委員会とユネスコに対するイコモスの信頼性を危うくすると非難した。
この発言は、世界遺産のコーディネイターとイコモス事務局の責任者であるヘンリー・クレア氏が行い、この発言は敗者側スペイン系の国々の今後の世界遺産登録になんらかの悪影響を与えるという印象を与えた。
- 4) 敗者となったマリア・ローザ女史は、更に投票の開始時と各投票の合間に立候補者の代理人を投票場に立ち会うことを求めたが拒否された。一方他の2名の候補者の応援者は投票場に立ち会っていたので、不公平きわまりないと述べている。
- 5) 投票結果は、コンピュータから直接スクリーンに映し出される予定であったが、実行されず、結果は手書きの紙に書かれたものが、他の2名の候補者の応援者の手から総会議長に渡されたとしている。
- 6) 第1回の投票結果が出るのに長引いたので1台のバスいっぱいの代表者が帰国の途についたにも係わらず、第2回の投票数が1回の投票数より上回るのはつじつまが合わない。

以上のことから、会長候補者であったマリア・ローザ女史は総会議長D・ラモン・ベンフィル氏宛文書で抗議を行った。

私が帰国の途についた10月24日早朝、ホテルからグアダハラ空港まで同行したペルーの代表者は、マリア・ローザはまことに気の毒であった。第1回目の投票ではマリア・ローザの了解の元にメキシコの候補者に投票し、2回目はマリア・ローザに投票した。大方は（おそらく南米グループ）そのようであった。

従って2回目にはマリア・ローザ女史の投票獲得数は1回目より増えるはずであったと話していた。

このように役員選挙にあたって多くの疑惑としこりを残したことに対して、事務局は誠意ある調査を行い、その結果を公表し、イコモスの信頼を回復すべく努力するべきであると感じている。

諮問委員会議 (ADVISORY COMMITTEE MEETING) 報告

石井 昭

本年次(1999年次)の諮問委員会議は「第12回 ICOMOS 総会」の開会の前日、すなわち10月16日に、メキシコシティの中心部にある PALACIO DE MINERIA (18世紀末の歴史的建築物、現メキシコ大学所属)において開催された。例年と違い会期が1日のみに限られたため、スケジュールは極めてタイトであったが、私自身は4種の会合に参加した。以下に順を追ってそれらの概要を報告する。

諮問委の本会議

9時から11時まで、委員長 Michael Petzet 氏(ドイツ)の司会で本会議が開かれた。主な議題は次の2件であった。

[過去1年間の総括] 前回(ストックホルム、1998年9月)の議事録を承認した後、執行部諸氏からその要点をフォローアップする形で補足的報告があった。(1)本部納入個人会費 - 低所得国20\$, 中所得国30\$, 高所得国40\$とする新方式を実施に移した。ただし3月末の執行委員会で細部を再検討し、各カテゴリーごとの該当国を多少変更したほか、高所得国の大規模国内委に関して200名超の部分は100名刻みで35\$, 33\$, 32\$と通減させることにした。(2) TWENTY BOOKS 第2集 - MONUMENTS AND SITES を主題とする1国1冊形式の書物を、アフリカ地域で3冊、アメリカ地域で5冊、アジア地域で6冊、ヨーロッパ地域で5冊、出版すべく各担当国で作業が進められてきた。今次総会までに完成できたのはその約半数である。(3) ICOMOS MEMBERS DIRECTORY - 本年4月、会長 Roland Silva 氏(スリランカ)のもとで各国内委員会から提出されたデータの編集が終わり、印刷に移ったが、校正作業が難渋しており、完成は本年末になろう。

[HERITAGE AT RISK] 危機に瀕し緊急に保護を必要とする文化遺産についてデータベースを整備することは ICOMOS の重要課題の一つである。執行委員として Michael Petzet (前出), Sheridan Burke (オーストラリア), Dinu Bunbaru (カナダ)の3氏が共同で作成した原案が、席上配布され、審議の結果、承認された。なるべく早い機会に ICOMOS NEWS 誌を通じて実施要領を公表し、全会員に参加協力を呼び掛けることとした。

執行委との合同会議

11時から14時まで、同じく Michael Petzet 氏の司会によって諮問委と執行委の合同会議が開かれた。議題の多くは総会の準備に関係するものであった。

[総会関係] (1)組織委員会報告 - 過去約3年間にわたり総会準備の実務を担当してきた ICOMOS MEXICO 1999 ORGANIZING COMMITTEE を代表して Carlos Flores Marini氏から、配布ずみのプログラムに即しつつ、総会とシンポジウムの日程・会場・移動手段・等について説明があった。参加者は登録手続を終えた会員だけで約100カ国・700余名に及ぶと報告された。(2)議長団 - 総会議長には慣例に従い招致国メキシコの国内委会長 Ramón Bonfil Castro 氏、また副議長には Akira Ishii (日本)、Nathalia Dusckina (ロシア)、Eugene Sindou (コートジボアール)の3氏を推挙したい旨、事務局長 Jean-Louis Luxen 氏から提案があり、了承された。(3)投票管理者 - 総会最終日に実施する次期本部役員選挙の TELLER として Marilyn Truscott 氏(オーストラリア)ほか8氏を選任したい旨、同じく事務局長から提案があり、了承された。(4)特別委員会 - 総会会期中の実務に従事する委員会として、規約に定められた CANDIDATURES COMMITTEE, CREDENTIALS COMMITTEE, RESOLUTIONS COMMITTEE, PROGRAM AND BUDGET COMMITTEE の4者だけでなく、加えて COMMUNICATIONS COMMITTEE を設置してはどうか、と同じく事務局長から

提案があり、可決された。また、委員会ごとに5名ずつ指名すべき委員については執行部諸氏に人選を一任することになった。

[投票権者名簿] 次期本部役員選挙の投票権者に関する資格審査は CREDENTIALS COMMITTEE によって行なわれるが、誤りなきを期するため、国内委員会委員長は一両日中に事務局職員のもとを訪れ、保管されている投票権者名簿、委任状、会費納入記録などを再点検して欲しい旨、事務局長から指示があった。

[執行委員会ワーキンググループ] (1) 国内委員会現況調査 - 主査の Christiane Schmuckle Mollard 氏 (フランス) が報告。世界約 100カ国にある NATIONAL COMMITTEE の組織と活動の現況を把握するべく、本年3月、アンケートを送ったところ、現在までに53カ国から回答が届いた。分析・総括はまだ済んでいない。(2) 国際専門分科委員会現況調査 - 主査の Ann Webster Smith 氏 (アメリカ) が報告。総数 20 の COMMITTEE にアンケートを送り、すべて回答を得た。長らく休眠状態にあった STONE, STAINED GLASS, ECONOMY OF CONSERVATION の3委員会がこのほど新任委員長のもとで再活性化されたことは喜ばしい。他方、いくつかの委員会に対しては、EGER PRINCIPLES を遵守すること、国内委員会との連携を強めてメンバーの交替を図ること、などを要請している。

[今後の総会開催地] 第13回総会 (2002年) をジンバブエで開催することが決定した。席上、執行委員 Dawson Munjeri 氏 (同国) から首都ハラレの国際会議場その他について紹介があった。また、第14回総会 (2005年) は中国が招致する予定である。同国国内委員会会長 Zhan Bai 氏がストックホルム会議 (1998年9月) での提案を再確認した。

GAZZOLA賞・名誉会員の選考会

16時から17時半まで、Saleh Lamei (エジプト)、Suzanna Sampaio (ブラジル) 両氏とともに選考会を開いた。元来、執行委員会によって任命された選考委員は委員長 Sherban Cantacuzino 氏 (イギリス) を含む4名であり、国内委・国際専門委から推薦された受賞候補者 15名 (GAZZOLA賞と名誉会員の双方: 11名、名誉会員: 4名) を対象として、7月末以降、通信会議をもって慎重な審査を続けたが、最終段階に至って委員長が事故により参加不能になったため、結論を出すのが遅延していた。この日の選考会において受賞者を下記の通り決定した。

PIERO GAZZOLA PRIZE - Roland Silva (Sri Lanka)

HONORARY MEMBERSHIP - Maurice Carbonnell (France), Olgierd Czerner (Poland), Hiroshi Daihuku (USA), Joan Domicelj (Australia), Jan Jessurun (Netherlands), Maija Kairamo (Finland), Harald Langberg (Denmark), Paul Mylonas (Greece), Andras Roman (Hungary), Augusto Carlos da Silva Telles (Brazil)

アジア・オセアニア地域会議

上記選考会のため遅刻して、17時半から18時半まで、副会長 Joseph Phares氏 (レバノン) の司会による地域会議に出席した。アジア・オセアニア地域における ICOMOS 加盟国は、昨年 (1998年) まで、日本、北朝鮮、中国、フィリピン、タイ、インドネシア、スリランカ、インド、パキスタン、イラン、ヨルダン、レバノン、オーストラリア、ニュージーランドの 14カ国であったが、本年から、韓国、サウジアラビアが加わって 16カ国に増えた。もっともこの会議に姿を見せたのはわずか数カ国のメンバーに過ぎなかった。また、会議とは言え特段の議題も提出されなかったらしく、私が入室した時には、テーブルを囲んで穏やかな懇談が続いていた。韓国国内委員会会長 Koh Byong-ik (高柄翊) 氏は早退の予定もあったせいか「この席で何か決めるのでしょうか」と質問した。「何も決まらないでしょう」と私が受け「2年前にモロッコ会議で申し合わせたことがあります。第1は出版物を含めた情報の交換、第2は地域内年次会議の企画、第3は ICOMOS 未加盟国に対する加盟勧誘です」と答えておいた。

日本イコモス国内委員会・理事会 JAPAN-ICOMOS EXECUTIVE BOARD

President 委員長	石井 昭	Akira ISHII
Trustees 理事	稲葉 信子	Nobuko INABA
	上野 邦一	Kunikazu UENO
	岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
	近藤 公夫	Kimio KONDOH
	田原 幸夫	Yukio TAHARA
	日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
	藤木 良明	Yoshiaki FUJIKI
	藤本 強	Tsuyoshi FUJIMOTO
	前野まさる	Masaru MAENO
	宮本長二郎	Nagajiro MIYAMOTO
	宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
	安原 啓示	Keiji YASUHARA
	山田 幸正	Yukimasa YAMADA
	渡辺 保弘	Yasuhiro WATANABE
Auditors 監事	石澤 良昭	Yoshiaki ISHIZAWA
	木原 啓吉	Keikichi KIHARA
Advisors 顧問	伊藤 延男	Nobuo ITO
	稲垣 栄三	Eizo INAGAKI
	坪井 清足	Kiyotari TSUBOI

小委員会 WORKING GROUPS

Chiefs 主査	益田 兼房	Kanefusa MASUDA
	羽生 修二	Shuji HANYU
	日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
	稲葉 信子	Nobuko INABA

国際諸委員会参加者 REPRESENTATIVES TO INTERNATIONAL COMMITTEES

Executive Committee	西村 幸夫	Yukio NISHIMURA
Advisory Committee	石井 昭	Akira ISHII
Specialized Committee on: Archaeological Management	牛川 喜幸	Yoshiyuki USHIKAWA
Structures	本中 眞	Makoto MOTONAKA
	日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
	坂本 功	Isao SAKAMOTO
Historic Towns and Villages	西澤 英和	Hidekazu NISHIZAWA
	上野 邦一	Kunikazu UENO
Underwater Cultural Heritage	福川 裕一	Yuichi FUKUKAWA
	荒木 伸介	Shinsuke ARAKI
Training	稲葉 信子	Nobuko INABA
Historic Gardens and Sites Vernacular Architecture	近藤 公夫	Kimio KONDOH
	大河 直躬	Naomi OKAWA
Wood	前野まさる	Masaru MAENO
	伊藤 延男	Nobuo ITO
	村上 裕道	Yasumichi MURAKAMI
	松本 修自	Shuji MATSUMOTO
	益田 兼房	Kanefusa MASUDA
Earthen Structures	渡辺 保弘	Yasuhiro WATANABE
	岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
Cultural Tourism	石井 昭	Akira ISHII
	宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
Legal Issues	河野 俊行	Toshiyuki KONO
Photogrammetry	西村 康	Yasushi NISHIMURA
Cultural Corridors	杉尾 邦江	Kunie SUGIO
	Stone	西浦 忠輝



JAPAN ICOMOS INFORMATION

Vol.4, No.9 7 Feb. 2000

日本イコモス国内委員会、委員長 石井 昭
事務局 担当理事 渡辺保弘 職員 我妻綾子
〒169-0072 東京都新宿区大久保 3-9-5-113 (株)文化財工学研究所 気付

JAPAN-ICOMOS OFFICE

c/o Bunkazai Kougaku Kenkyusho
3-9-5-113 Okubo, Shinjuku-ku, Tokyo 169-0072, Japan
Tel.03-3200-9355 Fax.03-3200-9423